

中国東南沿岸部の新石器時代

西 谷 大

I 序説

III 広東省

II 福建省沿岸地域

IV 討論

論文要旨

中国東南部は、およそ浙江・湖南・江西・広東という広範囲の地域を指す。この地域は、漢書によれば「交趾より会稽に至る七、八千里、百越雑処す、各種姓有り」とあり、いわゆる印紋陶が分布する地域に重なって、「百越」と表現されるさまざまな諸族が居住していたと思われる。さらに、春秋戦国期には、呉・越が、秦から前漢期には、南海貿易を支配した南越国が出現し、中原と争う程の勢力を持つようになる。このように、春秋戦国期以降、中国東南部は歴史学上、政治的、文化的に一定の発展を遂げているが、それ以前、先史時代からのつながりの中で、一体どのような歴史的経過をたどってきたのだろうか。本稿では、東南中国でも遺跡数が多く、時間的な連続性のたどれる、特に江南デルタ以南から珠江デルタにかけての沿岸地域に注目し、新石器時代中期から晩期をとりあげ、歴史的な動向とその内在的变化の要因について考察する。

広東・福建省という広範囲を扱うため、時間軸を土器編年によって設定した。従来の編年案を検討しつつ、広東珠江デルタの新石器時代中期から晩期をⅠ～Ⅴ期に、福建省閩江デルタをⅠ～Ⅲ期に分期した。それぞれの時期は、珠江デルタのⅠ～Ⅲ期がおおよそBC. 4000年前後からBC. 3500年、Ⅴ期がBC. 2000年前後に相当する。一方、福建閩江デルタⅠ期はBC. 4000～3000年、Ⅲ期がBC. 2000年ごろと考えられる。

両地域を比較すると、BC. 4000年前後以前の新石器時代の様相がまだ不明確ではあるが、両地域ともこの時期を境にして共通した遺跡分布を示している。即ち、デルタの上部の水系沿いまたは大陸沿岸部や島嶼部に、遺跡が形成され、デルタ内部には形成されない。また珠江デルタではⅠ～Ⅲ期、閩江デルタでは、Ⅰ期に遺跡が増加しており、これに後続する時期に、遺跡が減少する傾向が見受けられる。

珠江デルタ地域では、土器群の様相と、遺跡の空間分布から、Ⅰ～Ⅲ期において、デルタ上部から珠江口、大陸沿岸部までをテリトリーとする集団と、沿岸部にだけ遺跡を形成する2つのタイプの集団が並存したことを指摘した。この現象は新石器時代中期に遺跡を形成した各集団の沿岸・デルタ・河川における棲み分けを暗示しており、内陸から河川を通じた沿岸部への、各文化間のネットワークを構築していくきっかけとなったのではないかと推定した。沿岸部にのみ居住する集団は、デルタ上部を中心としてデルタ全域に居住する集団より、福建省沿岸や、対岸の台湾沿岸との交流が深い可能性があり、各集団間の関係は、時間の経過と共にその都度変化がみられる。

このように新石器時代中期においてなぜ突然遺跡の分布が濃密になるのか。それはこの地域の地形上の特性と海進海退という自然現象に左右された面が大きかったためであり、長江下流太湖の周辺地域との比較からも窺うことができる。中国東南部の沿岸地域では、この時期遺跡をとりまく自然環境、とりわけ、地理的な要因が遺跡の形成に大きく関わっており、それが歴史的な動向にも色濃く反映していたものと考えられる。

本稿では、中国東南部地域のうち、福建・広東省沿岸部の新石器時代中期から晩期を取り上げ、土器編年の再検討をおこなう。そして土器文化から、この地域の歴史的動向と内在的変化の要因の一端について考察する。

I 序説

1 研究史

福建省、広東省の考古学的研究は、各省単位に研究が進められてきた。そこで研究史も、各省ごとに述べたい⁽¹⁾。

福建省

福建省における考古学的な発見は、解放前にさかのぼるが、報告された事例はそれほど多くない。1931年、廈門で石斧が発見されている。これが、福建省における最初の遺物の発見報告であった(国分1972)。その後1937年に武平で、片刃石斧・石鏃・幾何学文を施した土器片が表面採集されている。

解放後の1950年代から1960年始めにかけて、福建省内でも遺跡調査が盛んにおこなわれるようになる。報告された遺跡は、曇石山・莊辺山遺跡など100ヶ所以上に及ぶが、いずれも遺物の表面採集による調査であった。(林剣1955, 蔣炳剣・葉文程1957, 黄文程・蔣炳剣1957, 馬春郷1957, 黄漢傑1957, 林宗鴻1958, 曾凡1958, 黄天水1958, 黄炳元1958, 呂榮芳1958, 福建省文物管理委員会1959・1961)。唯一、曇石山遺跡で、4次にわたって発掘調査がおこなわれている。

1950年代から1960年代の研究は、省内で発見された遺跡遺物が、黄河流域や長江流域などすでに発見されていた周辺諸文化と、どのような関連があるのか理解することを主眼としていたといえる。林惠祥は、長汀県河田区の遺跡調査報告で、省内の各地の遺跡を同一の「文化系統」に属するものとし、北方の影響と考えられた彩陶や黒陶等の遺物が長汀では発見されない点を重視し、福建省の地域性を主張した(林1957)。そして、華南全域に共通して分布する印紋陶や有段片刃石斧から、古代越族の文化を想定した。尹煥章は印紋陶が東南中国に広範囲に広がることから在地文化が存在するとし、その起源と発展が外来文化と複雑な関係の上に成立していると推定した(尹1958)。さらに尹煥章は印紋軟陶が存続する時期幅は、商周時代から春秋戦国時代であるとし、印紋硬陶の時期は、春秋・戦国時代を下限と考えた。また印紋陶と共伴して出土する遺物は、出土地域によって異なっており、江蘇・浙江省地域では、青銅器と共伴し、福建省では石器と共伴すると指摘している。1960年以前の研究は、福建省内で出土した考古遺物から主に、印紋陶と有段片刃石斧を取り上げ、それを古代越族文化との関連でとらえようというものが多く、

1964年に、曇石山遺跡第5次調査の発掘報告が刊行された。報告では、曇石山遺跡出土の遺物は、長江下流域の良渚文化のものと類似するとしているが、同時に在地的特徴も有しており、そ

のことが曇石山遺跡が周辺地域と比較して「原始的」な文化であると理解している。福建省内の編年作業の進展は、閩江下流域の曇石山遺跡を中心として、溪頭・庄辺遺跡等の発掘調査が進むことによって、これらの遺跡が「文化」として認識され、それが時間的にも連続し、継続したものであると理解する。またこの曇石山遺跡での「文化」が、系統的にどこの「文化」に類似するのかという視点で研究が行われている（張其海・呂宋芳1965）。

1976年の曇石山遺跡の第六次調査の報告書では、層位的に時間的変遷が捉えられ、下層から上層にかけて連続したものと考えられ、曇石山文化と命名された。しかし、曇石山文化の連続性については疑問が提出されている。即ち、新石器時代晩期に属する曇石山遺跡下層と中層は、出土遺物からみて連続性と継承関係が明らかであるが、曇石山遺跡の上層は青銅器時代に相当し、新石器時代晩期に属する下・中層文化とは、別の文化系統に属するとしている（呉1979・曾1980）。

このように、省内において各遺跡の遺物の内容が明らかになるにつれ、1980年後半以降、研究の方向も新たな展開を見せるようになる。その一つが、中国東南地域という地域設定はおこないつつ、さらに域内の在地性を重視しようとする研究である。「印紋陶文化」という概念だけで、この地域を規定すること自体に疑問が提出されたのもその流れといえる。1978年に開催された『江南地区印紋陶問題學術討論会』（彭1981）では、「印紋陶文化」という概念でこの地域を把握するのではなく、各地域の標準遺跡を代表として、地域設定をおこなおうとしている。

別の視点は、地域内の「文化」の系譜を求めようとする研究である。彭適凡は、それぞれの地域内で、時間のさかのぼる遺跡に印紋陶の系譜を求めようとする（彭1987）。後藤雅彦は、地域区分と時期設定ををおこない、福建省内の新石器時代の文化的特徴をとらえ、新石器時代晩期の文化を、周辺文化の関連でとらえ直し、河川を媒介とした内陸文化との関係を重視しようとした（後藤1991）。

広東省

広東省および香港・澳門で、最も早く考古学調査が始まったのは香港である。1932年、神父であった Daniel Finn は、香港政府の援助のもと、香港南 Y 島大湾遺跡の調査をおこなった（Finn 1937）。また、Walter Schofiel は、1935年、大嶼山の石壁東湾遺跡を発見し、1937年には発掘調査をおこない、印紋陶と縄文土器（縄蓆文土器）の時間的な前後関係を明らかにした（W. Schofiel 1975）。陳公哲は、1938年香港で表面調査で12カ所あまりの遺跡を踏査し、深湾・東湾遺跡で発掘調査をおこなっている（陳1957）。陳は、発掘した石器と土器が、大陸の東南部のものと類似する点から、これらの遺跡は新石器時代に属するとしている。1950年代以前の研究は、まだ組織的調査はおこなわれず、調査された遺跡数も少なく、時間軸の構築や地域性を問題にするまでには至っていない。

解放後、新石器時代の遺跡の発見が進む。広東省内の新石器時代遺跡の主要な調査としては、潮陽（広東省文物管理委員会1956）・清遠県清河支流（莫1956）・新豊江（楊1960）等があげられるが、1950年代から、1960年代にかけての調査は、遺跡の表面調査が主であった。しかし、発

見された遺跡は、120箇所近くに及び、広東省に対する考古学による知識は飛躍的に発展した。

香港では、香港考古学会が成立する以前であり、香港大学考古隊が、調査をおこない、大嶼山梅窩付近の万角咀沙丘遺跡で、調査をおこなっている（未報告）。

こうした状況をふまえ、時期軸を構築しようとする研究がおこなわれるようになる。賈蘭坡は、遺跡ごとの時間差をとらえようとした（賈1960）。また、張光直は、新石器時代の遺跡を、「縄文陶打製石斧期」として、大坭坑文化の範疇でとらえようとした（張1959）。

文化大革命後の重要な調査は、広東省での石峡遺跡の発掘調査である（広東省博物館他石峡発掘小組・蘇秉琦1978）。この調査により新石器時代晩期文化として石峡文化が提唱された。石峡遺跡で出土した遺物中に長江下流域の良渚文化の影響によるものが認められ、これによって、広東省の新石器時代文化が、広東省以外の長江中・下流の諸文化と何らかの関係があることが明白となる。

1980年代から90年代にかけて、遺跡の調査・発掘は飛躍的に増加する。発掘調査がより詳細になり、各遺跡において遺物が層位ごとに把握されるようになり、編年が次第に可能になったことが特徴としてあげられる。香港では香港中文大学が3年間にわたって東湾遺跡で発掘調査を行っている。精密な地形測量や、レベルを用いた記録、また花粉分析・プラントオパール等の自然科学的方法によって調査が進められ、この地域においては画期的であった（區・鄧1988）。深圳地区においても、1980年には、小梅沙・赤湾・鶴地山遺跡で発掘調査が行われた。1985年には、咸頭嶺遺跡で発掘調査が行われた。1988・89年には、中山大学人類学系と深圳博物館が、大黄沙遺跡で再度共同調査を行い、層位ごとの遺物の把握をおこない大きな成果を上げている。珠海地区では、広東省博物館と珠海図書館が共同で、発掘調査をおこない、後沙湾・草堂湾・東澳湾遺跡等、新石器時代中期から商・周併行期にかけての遺跡を発掘した。また、広東省博物館・三水県博物館が合同で実施した銀州遺跡では、従来の墓葬中心の発掘ではなく、住居と墓葬の関係に注目した発掘がおこなわれた。また、動物遺存体から当時の生業を復元しようという試みもなされている（朱1994・1995、銀州遺跡聯合調査隊1995）。

このように、珠江河口周辺の深圳地区や珠海地区、香港の島嶼部での発掘調査が増加するにしたがい、この地域の新石器時代は、より細かな時期編年によって、より具体的な理解が可能になりつつある。編年も、1980年代までは、朱非素の新石器時代を、早・中・後3期に分期する報告や（朱1984）、楊式挺の早期（西樵山細石器）、中期（西樵山一期文化）、晩期（西樵山二期文化）に分期するものが代表的であった（楊1985・1986）が、90年代に入ると、嚴文明や李子文は、珠海の、後沙湾遺跡、東澳湾遺跡の重層遺跡の層ごとの遺物の分析によって、編年をおこない、さらに当時の遺跡の生業を推測し社会復元をおこなった（嚴1991、李1991・1995）。區家発や、後藤雅彦は、福建・広東省を含む最近の研究成果をまとめるだけでなく、周辺文化が河川を媒介としてもたらされたという視点で、珠江デルタ地域の新石器時代から新石器時代中期から晩期を理解しようとしている。區家発は、福建・広東省は沿海地区に属するが、河川水系を通じて内地

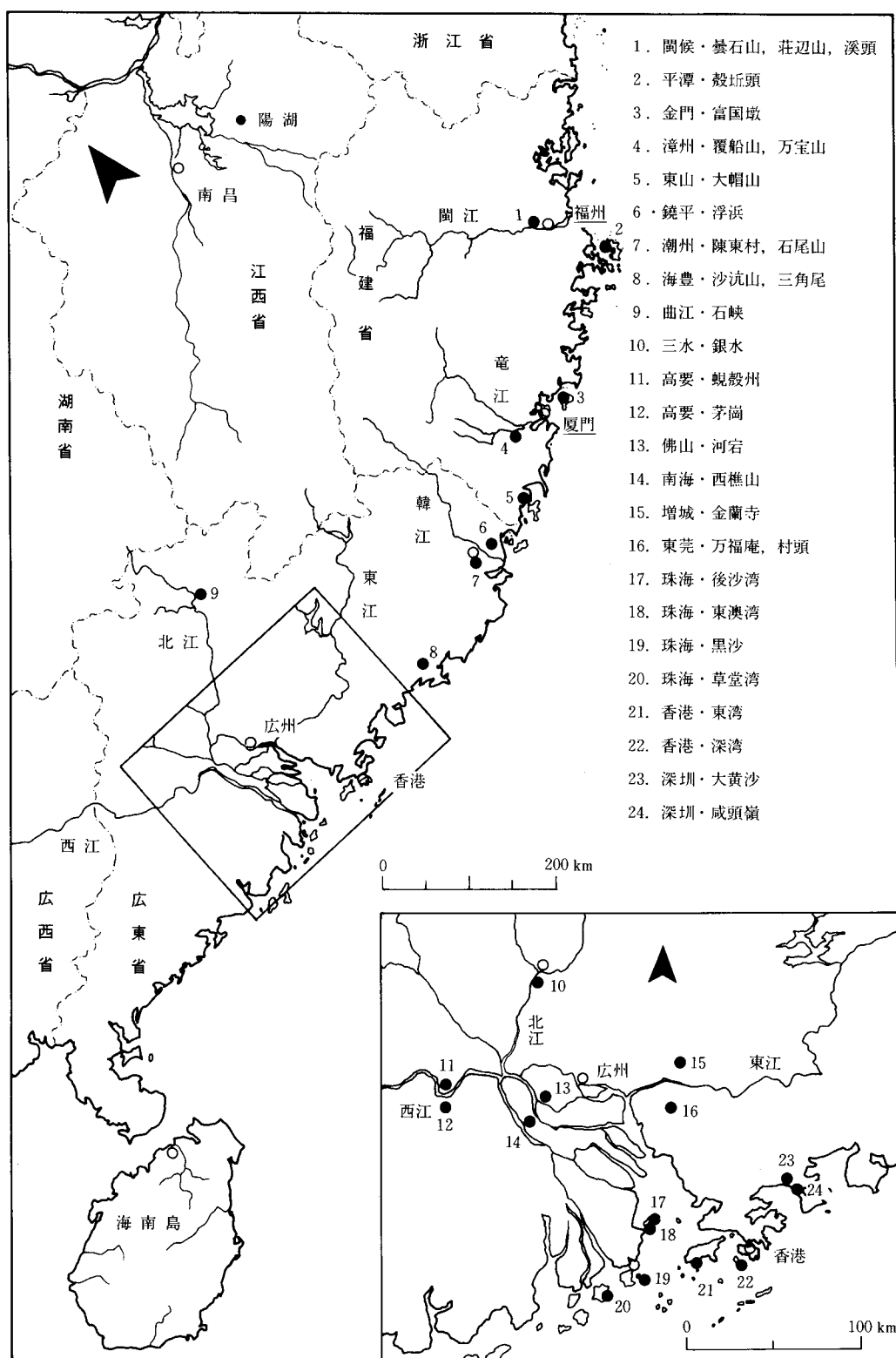


図1 主要遺跡分布図

区と結びつくとし(區1993), 後藤は福建省において沿岸部は, 閩江を通じて江西省と結びつき, 広東省では北江が石峡文化を経由し, 江西に通じ, 西江が封開地区を経由して広西に通じ, 三角州一帯付近で合流するとしている。そして華南の新石器時代文化に, 河川を通じたネットワークの存在を指摘している(後藤1994)。さらに鄧聰は, 珠江デルタ地域の遺跡を土器研究からだけでなく, 遺跡の立地, 石器組成等や, 当時の生態環境を含めた分析を行い, この地域の新石器時代中期を「大湾文化」という一つの共通した背景をもつ時代であると位置づけている(鄧聰・黄韻璋1994)。

このように, 珠江デルタを中心とした, 新石器時代の研究には, めざましいものがあるが, 一方で編年においても, 社会復元においても, また, 周辺の新石器文化とどのような関係にあったのか, さまざまな意見が錯綜している状況でもある。その原因の一つに, 共通した時期編年が確立していないことがあげられる。今後, さらに地域間の「文化」の比較と, 相互の具体的な影響関係を探るために, まず「文化」を, 何を基準として把握するのか明確にした上で, 時間軸を確立し, 同一レベルで諸地域を比較して, 「文化」の広がりや地域性の意味を再考する必要があると考えられる。

2 編年の方法

福建・広東省で, 層位的に一括遺物が把握され, 土器群による編年が可能な地域は, 閩江下流域, 珠江下流域のデルタ地域および, 北江流域である。各遺跡の土器群の編年を行うまえに, 編年方法について述べておきたい。

土器の編年には, 個々の土器についての詳細な観察が必要である。しかし, 現地で実見し, しかも土器の実測を行った個体数は限られており, 大半が, 報告の実測図によるものである。そのため, 土器編年に使用した土器の属性は限られた要素に限定されている。よって各遺跡で, 出土層位から, 一括遺物として判断できる土器群を基本として編年作業をおこなった。

本稿で扱う用途別の土器の器種・器形・文様の概念は, 以下の通りである。

器種・器形

煮沸容器

釜＝口縁部が外反し, 底部が丸底を呈する器種である。用途は煮沸用である。

鼎＝釜など煮沸具の底部に三足をつけたもの。用途は煮沸用である。

甗＝蒸す器。器形は鉢または罐で底に穴があるもの。

甗＝釜など, 煮沸用具上に, 甗を乗せて, 一体化させた器種である。

保存用または, 盛食器

壺＝肩部の張りが強く, 胴部の最大径が, 口径を上回るもの。

罐＝胴部がさほど張らないもので, 口径に比して器身の深い土器。

盛食器

鉢＝口径に比して、器高の低い土器を「鉢」と称する。碗として分類されているものの一部も、鉢に含める。

盤＝器高が低く、身が浅鉢を呈し、これに圈足がつくもの。

豆＝身が浅鉢を呈し、これに圈足がつくもの。圈足部の高さが、器身の高さより高い器種をいう。

杯＝小型で、口径に比して、器高が高いものを「杯」と称する。これに圈足がつくものも含める。

文様

中国考古学で使用する文様名称は、多種多様である。そこで分析をおこなうにあたって、分類の基準を、土器の製作技法と施文技術を重視した分類基準を設定してみたい。ただし中国考古学で従来文様として一括されてきた、土器製作過程で表面に形成される成形痕と、それ以外の文様とに区別する。

土器成形

土器成形の際、器面に形成されるものには、叩板に縄文をまき、表面を叩いてできる「縄文」状の叩き目文と、叩板に直接に刻まれた文様が器面に残る「叩板文」の2種がある。

縄文＝撚った荒い縄文を使用する物を「粗縄文」といい、撚った縄文の目が緻密なものを、「細縄文」という。

叩板文＝叩板に刻む文様によるものである。文様の種類は多く、主要なものをあげると、藍文は、篋目状の文様で、叩板に幅のある条痕を施したもの、方格文は格子目の文様。葉脈文は、日本考古学での綾杉文に相当する。

施文方法による分類

施文方法として、張り付け・沈線・刺突・圧痕・透かし・彩色に分類する。それぞれの施文技術と、主な文様の中国考古学での名称を以下に示す。

張り付け＝「附加堆文」「凸稜」とするもの。器面に粘土紐を張り付けたもの。

沈線文＝弦文（横方向の平行沈線）・折曲文（W・Z・M字状の沈線）

刺突文＝円圈文・重圈文（竹管先端による刺突）、戳点文（ヘラ状工具による刺突）

圧痕＝貝齒文・圧印文（貝殻腹縁）、

透かし文様＝鏤孔

彩文＝彩色を施すもので、文様の形態は多種類のため、各遺跡ごとに述べる。

Ⅱ 福建省沿岸地域

1 地理的位置づけ

福建省は、東は台湾海峡に面し、浙江・江西・広東の三省に接する。この地域の地形は、低山

性の山地・丘陵と盆地・平原とが交互につらなる。この山地は華中平原から華南の沿岸の間に幅広く横たわる嶺南山地と呼ばれる丘陵性山地であり、標高1000～2000m級の山地が東北から西南方向へ連なる。この山地はおもに花崗岩で組成されており、山間部を北から代表的な河川として、閩江、晋江、九龍江が流れ、東シナ海へ注ぐ。下流域は、沖積平野を形成し、海岸はリアス式海岸で、沿岸部には、127の島々が点在する。しかし、長江下流の江南デルタや、珠江下流域の珠江デルタのような面積の広い沖積平野は形成されない。福建省は、隣接する江西省・浙江省・広東省と丘陵山地で隔てられているだけでなく、山地が、海岸部まで迫っているため、省内でも水系ごとの地域が地理的文化的に一つのまとまりとしてとらえられる。

2 土器群と把握と分析

殼坵頭遺跡 (福建省博物館1991) (図2, 表1)

福建省平潭県海壇島に位置する。福建省のリアス式海岸の沿岸部には、大小127の島が点在するが、海壇島は、これらの島々のうちで、もっとも面積が広い。島の位置は、閩江三角州の対岸に位置するが、この地点は、台湾海峡がもっとも狭くなる地点でもある。島の地勢は平坦で、低丘陵が広がり、もっとも海拔標高の高い島北部の君山で海拔400mを測るのみである。殼坵頭遺跡は、島の北西部に位置し、前面は湾を形成する。遺跡は現在の耕地から1.5～2m程高い微高地上に立地し、海拔標高約5mを測る。

遺跡は、1964年に発見され、その後数回に渡って調査が行われたが、当遺跡の東側は道路によって寸断されている。また貝層は、1958年当時、「焼殻灰」を作るため採掘を被っている。このように遺跡は相当の破壊を受けている。貝殻の散布状況から遺跡の範囲を推定すると、南北65m、東西50mの広がりを持ち、面積は3000m²を測る。1985年秋から1986年春にかけて、福建省博物館の考古隊が4ヶ月にわたって発掘調査を行った。30のグリッドを設定し、発掘総面積は、722m²に達する。

遺跡は、第1層から6層に分層され、1～3層は、唐・宋以降の層で、4A層以下が、新石器時代の層である。そのうち4A層で、「印紋陶」片が出土している。

出土土器群

出土土器の器種構成は、釜が全体の80%近くを占める。貯蔵の一形態である罐の出土量は非常に少なく、鉢が15%、豆9%の比率である。

釜の断面形は、Aの口縁部が外反し胴部は屈曲を持たないものである。器面には、縄文による叩きを施し、磨り消した後、文様を施している。施文方法は、沈線文・刺突文・圧痕文・刻目文で、施文位置は、肩部を主体とし、胴部に施文する土器もある。

刻目は、肩部に鋸歯状の文様を、口唇部に指甲文(爪形文)を平行に施す。圧痕文は、貝歯文(貝殻腹縁による圧痕)で、肩部に平行に施文するものと、肩部と胴部に綾杉状に施文するもの

がある。刺突文は、戳点文（ヘラ刺突文・ヘラ押し引き）を肩部に施す。

表1 殼丘頭遺跡

技法 器形	成 形 技 法				施 文 技 法				
	口縁・断面	素文	縄文	叩板刻目	彩色	圧痕	沈線文・押し	刺突文	刻目
釜	A		麻点文施した後磨り消す			肩部に貝歯文	口縁部に平行沈線交差した沈線	肩部刺突文	肩部鋸状文
			麻点文			肩部と胸部に緩杉状貝歯文	肩部斜行沈線文		口唇部指甲文

曇石山遺跡（華東文物工作隊福建組・福建省文物管理委員会1955，福建省文物管理委員会・廈門大学人類学博物館1961，福建省文物管理委員会・廈門大学考古実習隊1964，福建省博物館1976・1983）

閩侯県曇石山に位置する。遺跡は閩江の下流域で、デルタが下流に向かって扇状にひろがるその最上部に位置する。現在は、海岸から約50キロ内陸部に入った閩江の左岸で、現在の河面からは、比高20mの河岸段丘上に位置する。

1955～1983年まで7次の調査がおこなわれている。文化層は、3層に分層され、灰坑33基、墓葬51基が検出されている。

層の切り合い関係から、第6次と、第7次で報告された遺物群を中心に述べていきたい。層と墓の切り合い関係から、第6次下層・第7次下層→第6次下層墓→第6次中層墓→第7次中層墓という変遷が認められる。

曇石山下層土器（図2，表2）

器種としては、釜・罐・圈足鉢がある。鉢は、下半部が復元されていないため、圈足をもつかどうか不明である。

釜の断面形は、Aの口縁部が外反し胴部は屈曲を持たないものと、Cの口縁部が外反し、胴部下部に明瞭な屈曲を持つものに分類できる。釜の成形技法は、素面のものと、縄文による叩きを施すものの両種がある。その他の器種については、復元された土器が少なく、器種と施文方法・文様の相互関係が把握できない。また、土器のどの部位に文様を施すのか不明である。土器片から文様の施文方法と種類を述べると、施文方法は、張り付け・刺突・圧痕・刻目があり、張り付け文の附加堆文は、粘土帯上部に刻目を施す。刺突文は、竹管で刺突したと思われる円文（円圏文）や、刻目による羽状文や列点文を施す。

表2 曇石山遺跡下層

技法 器形	成形技法				施文技法				
	口縁・断面	素文	縄文	叩板刻目	張り付け	圧痕	透かし文様	刺突文	刻目
釜	B・C	○	細縄文						
土器片		○	麻点文		附加堆文	圧印文		円圏文・指 甲文	刻・文

下層墓土器群

器種としては、釜・罐・圈足罐・圈足鉢・圈足杯・豆がある。出土点数が少なく、構成比率は不明である。下層の土器組成と比較して、煮沸用土器が、釜主体であることは変化がないが、圈足罐・圈足鉢・圈足壺が新たな器種として加わる。

釜の断面形は、Bの口縁部が外反し胴部に屈曲をもつものと、Cの口縁部が外反し、胴部下部に明瞭な屈曲を持つものに分類できる。釜の成形技法は、縄文による叩きを施すものと、叩板によるものの両種がある。出土量は下層と比較して、縄文による叩き成形は減少し、叩板刻目による方格文を施したものが増える。圈足罐・圈足鉢は、ほとんどのものが素面で、下層で顕著であった刺突・圧痕・刻目という施文方法による文様はほとんど見られなくなる。その一方で、彩色・透かし文様など、従来のものとはまったく異なる施文方法が認められる。

表3 曇石山遺跡下層墓

技法 器形	成形技法				施文技法				
	口縁・断面	素文	縄文	叩板刻目	張り付け	圧痕	透かし文様	刺突文	刻目
釜	B・C			方格文					
土器片		○	麻点文		附加堆文	圧印文		円圏文・指 甲文	刻・文
罐			粗縄文		附加堆文				
罐圈足	○								
鉢圈足	○								
豆							○		

中層墓土器群 (図2, 表4)

器種としては、釜・罐・圈足罐・圈足鉢・圈足杯・豆がある。墓葬から出土した土器であり、構成比率は、居住形態の器種構成を表していない。参考までに、器種構成比率をみると、煮沸用土器は釜主体であり、その他の器種構成は、中層と比較してそれほど大きな変化は認められない。圈足杯は、下層墓で圈足罐として分類した土器の頸部がのびて器形が変化したものと考えられる。

釜の断面形は、Bの口縁部が外反し胴部は屈曲を持つものと、Cの口縁部が外反し、胴部下部に明瞭な屈曲を持つものに分類できる。また釜は、胴部最大径が、約25cm位のものと、約15cmの2種のサイズが認められる。釜の成形技法は、縄文による叩きを施すものは、ほとんど認めら

れず、叩板刻目による方格文または、条文を施す。また圈足罐・圈足鉢は、ほとんどのものが素面で、下層墓出土のものと同様に、彩色・透かし文様を施す。

表4 曇石山遺中層墓

技法 器形	成形技法				施文技法				
	口縁・断面	素文	縄文	叩板刻目	張り付け	圧痕	透かし文様	刺突文	刻目
釜	B・C								
鼎		○							
罐									
罐圈足		○							
鉢圈足		○							
豆							○		
杯									○

溪頭遺跡（福建省博物館1980・1984）

遺跡は、閩江下流域閩侯侯県白沙公社溪頭村に所在し、閩江の北方向にのびた支流の東岸の台地上に立地する。遺跡の東北部から西南にかけては、緩やかな傾斜面を呈する。

遺跡は、1954年の調査の際発見され、その後、1975年の年末から1976年の春にかけて、福建省博物館と廈門大学との第1次合同調査が行われ、1979年10月から1980年1月にかけて、第2次調査が行われた。1・2次の発掘調査方法は、5×5mグリッドを50ヶ所設定し、発掘総面積は、1300m²に達する。層序は、第1層から5層に分層される。2層は、攪乱をうけた印紋硬陶の層で、2～4層を上文化層とし、5層を下文化層と認定している。遺構としては、灰坑33基、墓葬51基が検出されている。

これまでの調査により上文化層は、曇石山遺跡上層に比定され、下文化層が新石器時代に属し、曇石山遺跡中・下層に比定される。なお出土土器はすべて墓葬から一括して出土した副葬品であり、居住形態の器種構成を反映したものではない。

墓葬の切り合い関係は、以下に示す通りである。

下層	M14			
↓	M28・30	M10・M19	M37	M46
上層	M32	M21	M38	M41・45

早期墓（図2）

報告された土器点数が少ないため、器種構成を統計的に把握できない。器種は、釜・圈足付罐・豆である。釜は、Bの口縁部が外反し胴部は屈曲するものと、Cの口縁部が外反し、胴部下部に明瞭な屈曲を持つものに分類できる。土器の成形技法は、叩板による成形で、叩板の文様は、平行沈線である条文か、方格文の交錯条文である。また釜は、胴部最大径が、約25cm位のものと、

約15cm のものと 2 種のサイズが認められる。

圈足罐は、素面のものと、成形の際、叩板によって方格文（交錯条文）を器面に残すものの 2 種類がある。いずれも胴部最大径部分に、1 条の張り付け突帯をめぐらす。1 点、彩色を施すものが出土している。赤色の彩色で、圈足部の表面と裏面に、縦方向に平行させた文様を施し、胴部に卵点文を施す。豆は素面である。

晩期墓

器種としては、釜・罐・圈足罐・圈足鉢・圈足壺・豆・杯がある。墓葬から出土した土器であり、構成比率は、居住形態の器種の構成を表していない。参考までに、器種構成比率をみると、煮沸用土器は釜主体であり、圈足罐、圈足鉢、豆、圈足壺がこれに次ぐ。

釜の断面形は、B の口縁部が外反し胴部は屈曲を持たないものと、C の口縁部が外反し、胴部下部に明瞭な屈曲を持つものに分類できる。胴部最大径が、約30cm 位のものと、約20cm のものと 2 種のサイズが認められる。釜の成形は、叩板による交錯条文（方格文）を施す。

罐は胴部が張るものと、肩部と底部付近に稜をもつものがある。土器のサイズは、高さ約20cm、胴部最大径約25cm のものと、高さ約12～15cm、胴部最大径12～15cm のものの 2 種に分類できる。圈足壺は、高さ30cm、胴部最大径25cm を測り、大型化する。圈足壺は、叩板による成形で、圈足部の文様は条または錯条文である。透かし文様は、豆にだけ施されるが、円形の透かし文に加えて、十字文の透かし文を施すものもある。杯は把手が付き、この部分に平行沈線で施文するものもある。

晩期墓は、墓の切り合い関係から、M32号墓の土器が、晩期墓の中でも時期的にさかのぼるとされる。しかし、出土した土器の点数がわずかに 4 点であること、これらの土器は形式からみて晩期の土器群の範疇に含まれると考えられることから、この 4 点の土器を、別型式とし、独立させる積極的根拠は見いだせない。

3 編年

黄振鏞は、省内時期的変遷を、蚶殼墩類型→曇石山下層類型→曇石山中層→曇石山上層類型という概念で捉えた（王1981）。各類型に対応する遺跡は以下の通りである。

蚶殼墩類型 金門蚶殼墩・閩侯溪頭の一部の土器・平漂南厝場

曇石山下層類型 曇石山遺跡下層

曇石山上層類型 曇石山遺跡上層

後藤は、省内の遺跡の編年を以下のように捉えている（後藤1991）。

第一段階 溪頭遺跡下層

第二段階 曇石山下層

第三段階 A 曇石山下層墓・溪頭遺跡早期墓

B 曇石山遺跡中層墓 A・溪頭遺跡晩期墓 A (M32)

C 曇石山遺跡中層墓 B (8次)・溪頭遺跡晩期墓 B・庄辺山

年代の目安として、C14による年代測定値を記す。

表5 年代測定値

遺 跡	資料採点取地点	測 定 資 料	年 代
蚶殼墩遺跡	不明		BP5460±320 BP5800±340 (5500～3940BC)
殼丘頭遺跡	上層 下層	貝 (ZK2336) (ZK2337) (ZK2338)	BP4570±100 (3496～3100BC) BP4610±90 (3505～3142BC) BP4560±105 (3494～3049BC)
溪頭遺跡	不明	Sb27 Sb28	BP4240±190 (2480～2100BC) BP4310±190
曇石山遺跡	T119第3層 文化層	貝 (ZK0098) 骨 (ZK0099)	BP3000±90 (1999BC) BP3500±70 (1743BC)

* 溪頭遺跡は、熱ルミネッセンス法

* 蚶殼墩遺跡の年代は、安志敏 1981 『關於華南早期新石器時代の幾個問題』 文物集刊3 による。

遺跡の層の上下関係から、王や後藤が主張するように、曇石山遺跡下層の土器群→曇石山遺跡下層墓を指標とする土器群→中層墓の土器群という時期的な変遷がまずとどれる。溪頭遺跡早期墓の土器群は、釜の断面形がB・Cで、胴部に稜をもつ特徴や、圈足罐の器形、それに圈足罐に施された紅色の彩色文様に、同一型式が出土することから、時期が併行すると考えられる。次に殼丘頭遺跡で出土した土器群の施文方法は、沈線文・刺突文・圧痕文・刻目文で、文様は列点文状の指甲文（爪形文）・綾杉状の貝齒文（貝殻腹縁による圧痕）・戳点文（へら刺突文・へら押し引き）の刺突文を特徴とする。溪頭遺跡下層においても土器片ではあるが、殼丘頭遺跡で出土した土器片と同様の施文方法による文様を施したものが、出土している。溪頭遺跡下層は、溪頭遺跡晩期墓よりも層位的に下層に位置することから、殼丘頭遺跡の土器群は、曇石山遺跡下層墓および溪頭遺跡早期墓よりも時期がさかのぼるものと思われる。

次に問題になるのが、曇石山遺跡下層から出土した土器群の位置づけであろう。

曇石山遺跡下層で出土した土器群は、層位から、曇石山中層より時期がさかのぼる。釜の断面形は、AとCに分類され、釜の成形技法には、素面のものと、縄文による叩きを施すものの兩種がある。また施文方法は、張り付け・刺突・圧痕・刻目によるもので、文様は、附加堆文に刻目を施したものや、竹管で刺突したと思われる円文（円圈文）、刻目による羽状文や列点文を施す。

筆者は、曇石山下層の土器群は、曇石山中層の土器群には連続しないと考え、新石器時代中期から後期をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に編年し、さらにⅢ期を、前・中・後の3時期に分期した。

Ⅱ・Ⅲ期とⅠ期との土器群の相違は、Ⅰ期の器種構成が釜が主体であることにある。一方、Ⅱ・Ⅲ期には、釜・甗・甗・罐・罐圈足・圈足鉢・壺圈足・豆・杯と、器種の増加が認められる。

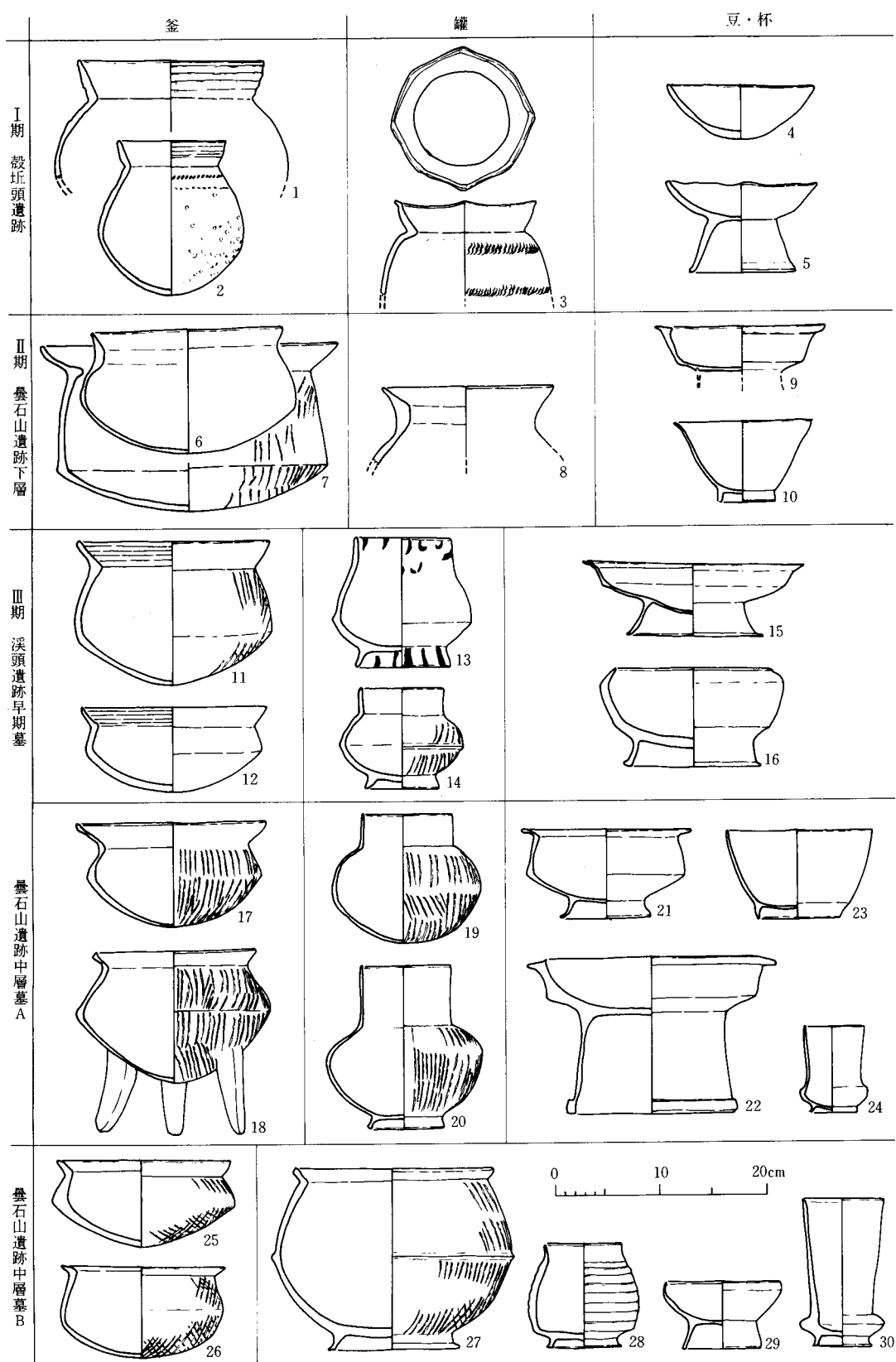


圖2 福建省土器編年圖

I期とII期の土器器種と用途の比較は、殻丘頭遺跡出土の完形土器数が少なく難しい。しかし、II期以降、圈足付罐・壺が増加し、貯蔵用器種が増加する点と、盛食器が出現する点が、I期と大きく異なる。土器の成形技法は、II期には、縄文叩きが存在するが、III期以降、条文、叩き板に直接刻みを彫り込み、叩き成形を行う方法が主流となる。また、土器の胎土も夾砂陶から、泥質陶への変化が認められる。文様は、I期に顕著であった、釜の器面を一度磨り消し、その上に、押し引き・文様を施す技法は認められない。II期に竹管による円圈文が認められ、III期の前期には、赤色彩文が出現する。以下、編年と遺跡の対応関係を示した。

I期 殻丘頭遺跡・溪頭遺跡下層・平漂南厝場遺跡

II期 曇石山遺跡下層（第6・7次）

III期前葉 溪頭遺跡遺跡早期墓・曇石山下層墓

中葉 曇石山遺跡中層墓（中層墓A）・溪頭遺跡晩期 M32（晩期墓A）

後葉 曇石山遺跡8次調査分（中層墓B）・溪頭遺跡晩期墓（B）

III 広東省

1 地理的位置づけ（図1）

広西省から、広東省にかけての中国華南地区の地形のほとんどは、低山と丘陵で、幅の広い谷地と山間盆地がその中に交錯しており、単独で海に注ぐ河川のいくつかは、下流に沖積平野を形成する。韓江下流の潮汕平原、竜江下流の樟江平原などが比較的大きな平野を有するが、珠江下流に形成された珠江デルタはその中でも大きな平野で、現在の面積は11000km²を占める（西江・北江・東江の三角州が含まれる）。本稿で主として扱う、新石器時代の中期から後期の遺跡が特に密集するのは、河川の下流域、とくに三角州周辺地域である。

ところで、中国南部の河川と、東南アジアの河川には、共通する特徴があり、河川との関わりの上で共通する要素があると思われる。遺跡形成にも密接に関連していると考えられる。そこで、広東省から東南アジアにかけての河川の特徴について、述べておきたい。

中国南部から東南アジアへに分布する巨大河川、長江・紅河・メコン川・チャオプラヤー川は、すべてチベット高原に源を発し、一度雲南を経由して四方へ流れていく。珠江もこうした河川の一つであり、雲南を源流とする西江を経由して、広州を河口とし巨大なデルタを形成する。⁽²⁾ また珠江は、一本の河川ではなく、広東省の東部を流れる東江、湖南省と江西から流れる北江の各水系からなる。このうち西江は、流路がもっと長く2129kmに達する。本流の水源は、雲南省東北部の烏蒙山地で、南盤江と呼ばれている。南盤江は貴州に入ると北盤江と合流し、広西省では柳江、郁江と順に合流しながら、紅水河、黔江、潯江と名前を変えた後、広東省に入り桂江と合

流し西江と呼ばれる。郁江は広西省の省都南寧に、桂江は湖南省に通じる河川である。北江の上流部は、それぞれ湖南省と江西省に源流をもつ武水と、夷水からなっており、英徳、清遠を経て山水付近で西江と合流する。このように、珠江は華南地方をを東西南北に流れ、西江・東江・北江の3河川が広州付近で合流し、河口を同じくするという性格をもつ。後述するが現在でも珠江は水上交通の中心で、この地域における交通の大動脈である。

2 土器群の把握と分析

土器群の把握が、層位的に可能な重層遺跡を取り上げ、以下分析をおこないたい。

咸頭嶺遺跡 (深圳博物館・中山大学人類学系1990)

遺跡は、広東省深圳市宝安県大鵬鎮咸頭嶺村に所在し、海拔約6mの海岸砂丘上に立地する。この砂丘は海岸から約300m離れた内陸部に位置し、背後には、現在後背湿地を有する。おそらく遺跡形成当時は、この後背湿地は内海を形成していたため、遺跡は内海にむかって嘴状にのびた、砂丘の入り口付近に形成されたと考えられる。後背湿地の周囲は、低丘陵が屏風のように広がり、最も高い求水嶺で海拔標高約500mを測る。小河川が後背湿地に流れ込み、外海へと通じているが、かつてこの後背湿地は、船泊まりとして利用されていたという。

遺跡は、1981年発見され、その後、1985年と1989年の2回にわたって発掘調査がおこなわれた。遺跡の層序は、大きく2層に分層され、第2層が新石器時代の層である。文化層の厚さは、この地域の砂丘上に立地する遺跡には珍しく、0.4~1mを測る。また、遺物の分布状況と、トレンチによる遺跡範囲の確認から、遺跡は東北から西南へ120m、西北から東南に110mの広がりを持ち、面積は13200m²を測る。珠江デルタ地域の砂丘上に立地する遺跡としては、大規模な遺跡に属する。

土器器種構成 (図3~7, 表6)

出土土器の器種構成は、釜が全体の50%を占め、鉢約36%, 圈足鉢8%の比率である。

釜は口縁部が肥厚せず外反し、先端部がややとがる。胴部は膨らみ稜をもたないが、図3の3, 図4の1・4のように肩部から胴部にかけてやや張るものもある。口縁が蒲鉾形に肥厚するもので、口唇部に凹状に溝をもつものが1点だけ出土している。釜の大きさは、胴部の直径が30cm前後のもの(図3・4), 15cm前後のもの(図5, 3~6, 8・9)に分類できる。成形は、非常に目の小さな縄文による叩きによっておこなわれ、土器の焼成もよく器壁も薄い。釜で施文を施すものは、縄文による叩き成形をおこなった後、口縁部の表面または、肩部に施す。施文方法は、貝劃文(貝殻腹縁による沈線)・貝印文(貝殻腹縁による圧痕)・刻劃文(沈線文)がある。

貝劃文のうち、口縁部下端と胴部に横方向の沈線を施し、文様帯を構成した後、その間に施文するものと、口縁部に施文するものに分類できる。図4の2, 図6の5・7・10・12・13は、文

様帯を構成するもので、内部に綾杉状の沈線文様を施すものと、5・7のように沈線で重半圈文または、山形文を加えて3列に施すものがある。図4の3、図6の4・8は、肩部に波状文を施すものである。図4の1は、口縁部に施文する。

図4の4、図5の7・8・9・10は、貝印文（貝殻腹縁による圧痕）を施したものである。4は胴部肩部の成形痕をなで消した後、横方向に2条の沈線を施し、その間に斜め方向に貝印文を施す。図5の8は、横方向に貝劃文で2条の沈線を施し、その間をさらに斜め方向に貝劃文を施す。9は、8と同様に貝劃文で横方向に3条の沈線を施すが、その間は施文しない。10は、肩部から胴部にかけて横の方向の貝劃文による沈線を6条施し、5つの文様帯を構成する。そして最上部と最下部の文様帯に、斜め方向の貝劃文を施す。

鉢は、文様を施さないものと（図7、1・2・4～7）、施すもの（図6、14～21）に分類できる。文様を施さない鉢は浅鉢形を呈し、大きさから直径が約15cmのものと、30cmのものに分類できる。いずれも縄文による叩き成形をおこなわず、胎土は泥質である。図6の14～21の土器片は、おそらく浅鉢形を呈すると推定される。14・16・17は、横方向に沈線を施し、その間にさらに斜め方向に貝殻圧印文を施す。15は、沈線を4条施し、その間を幾何学文で施文する。

圈足鉢の完形品が2点出土する（図5、11・12）。いずれも身が鉢形で口縁が外反し、口縁部の先端は尖る。胴部は張らない。身の底は平底になり、圈足部分の器高が低い。胎土は泥質で、文様はない。

盤は、完形品が1点出土している（図7、4）。身が浅鉢形を呈し、胴部は張らない。口縁部の先端は尖る。身の底は平底になり、圈足部分が低く、上部がやや内反する。土器の胎土は泥質で、器面は丁寧に磨きを施しており、文様は施文しない。

器座は、2つに分類できる。図7の8は、ラッパ状に開く器形で、表面を丁寧に調整を施した後、円形の鏤孔（透かし）と赤色を用いた彩色を施す。鏤孔は、孔径2cmと他の遺跡で出土する鏤孔と比較すると大きい。彩色は、この鏤孔の周囲と表面の上端部と下端部に横方向に施

表6 成頭嶺遺跡

技法 器形	口縁・断面	成形技法			施文技法				
		素文	縄文による 叩き技法	叩板刻目による 成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し 引き	刺突文	透かし
釜	A・肥厚無 ・先端尖る		細縄文			貝印文	刻劃文・貝 劃文	竹管・貝劃文	
罐						貝印文			
鉢		○				貝印文	刻劃文		
圈足鉢(盤)		○							
豆		○							
器座			細縄文		○				鏤孔

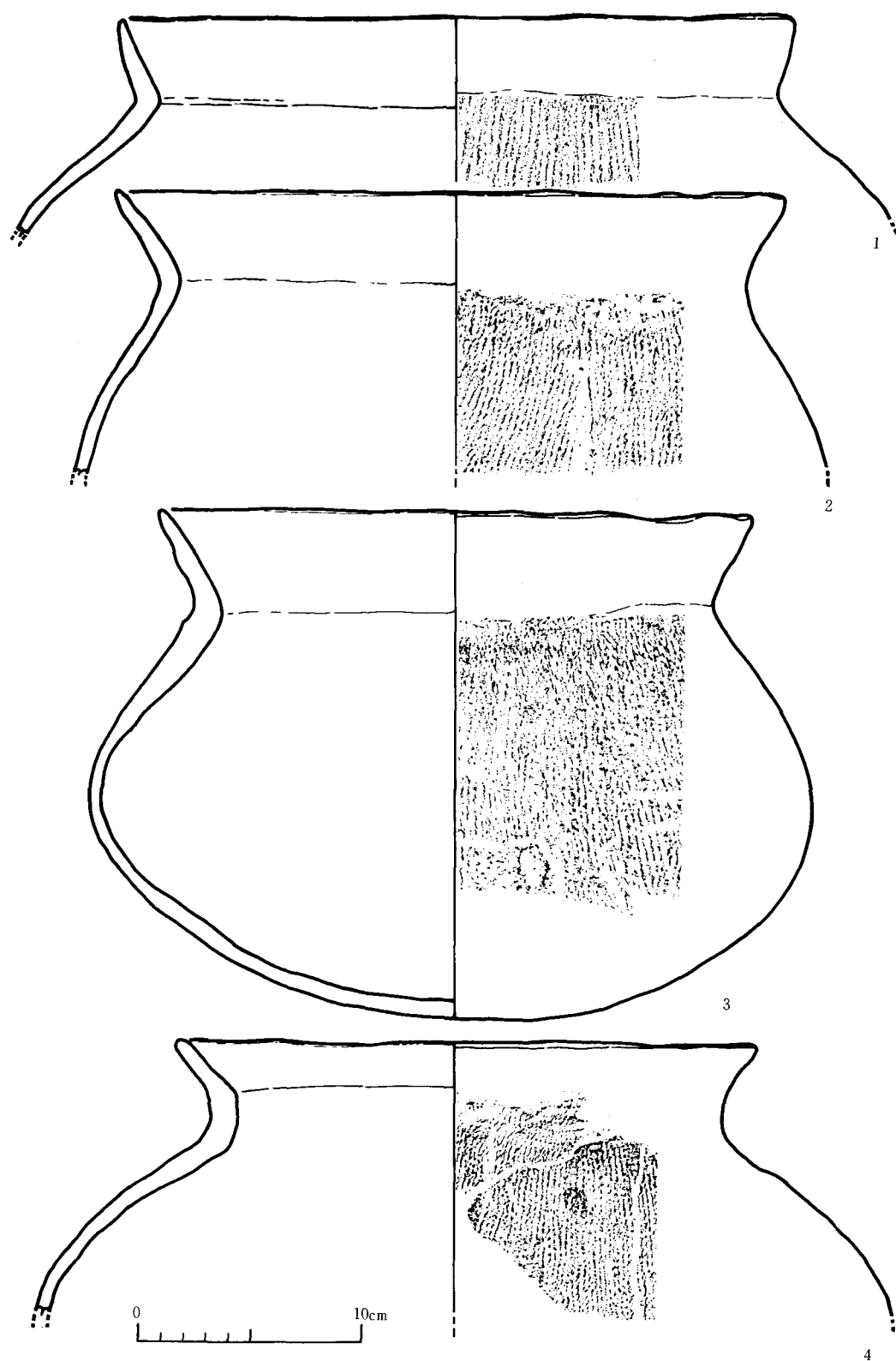


圖3 咸頭嶺遺跡出土土器 (1)

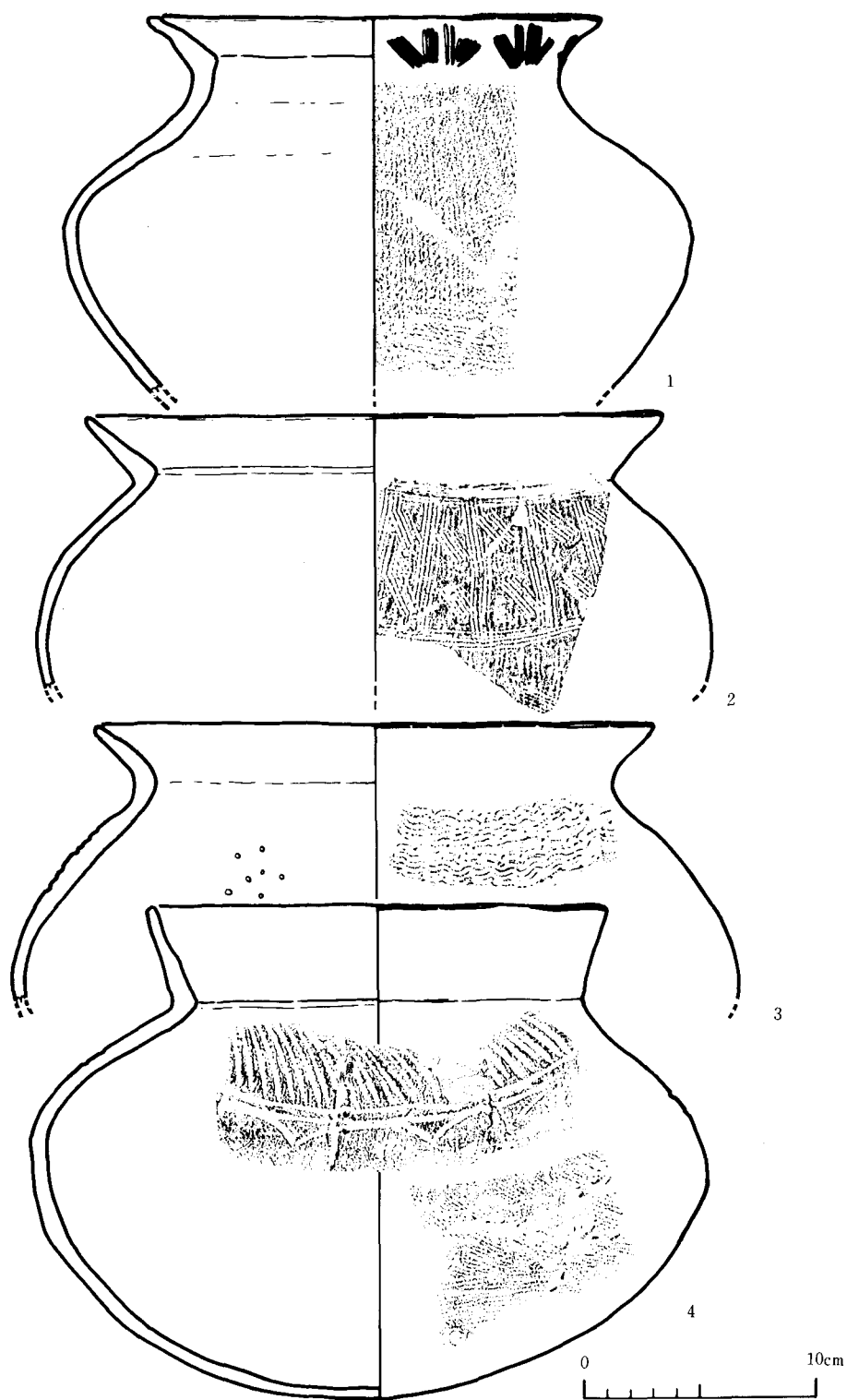


図4 咸頭嶺遺跡出土土器(2)

す。図7の9～12は、鼓形で、胴部の中央部がくびれ、器壁が2～3cmと分厚い鼓状の器座である。縄文によって叩き成形し、文様は施さない。

大黃沙遺跡 (深圳博物館・中山大学人類学系1990)

遺跡は、深圳市宝安縣葵涌鎮に位置する。

遺跡は、咸頭嶺遺跡と同様に、海岸砂丘上に立地する。遺跡発掘当時、遺跡の前面には海岸が迫っていたが、これは砂取りが原因であるという。その後、砂丘の砂取りのため、当遺跡は破壊され、現在は消滅している。

遺跡は、1981年に発見され、その後、1988・1989年の2回にわたって発掘調査がおこなわれた。

1989年発掘次のT2 (第2トレンチ) は、第1層から第5層に分層される。第2層から第5層までが、新石器時代の層である。1988年発掘時の第1トレンチは、第1層から6層に分層され、第2層は一度攪乱を受けており、陶磁器が混在する。遺跡のすぐ北側の家屋を建設する際、攪乱をうけた可能性も考えら得る。第4層と第5・6層が新石器時代の層である。層位的に一時期のものとして取り扱うのに、問題は残すが、遺物内容から見て、陶磁器以外の土器群は、新石器時代の一括遺物として把握することにする。

土器器種構成 (図8～13)

1988年次第5・6層土器群 (図8, 表7))

報告書では、出土した土器を一括して報告しているため、各層での出土土器の器種構成は不明である。実見した状況からは、5・6層の器種構成は釜と盤で、それぞれほぼ同数の個体数が出土すると推定される。釜の器形は、口縁部が外反し、断面形が逆L字形を呈し、胴部が屈曲せず丸みをおび、丸底を呈するものと (図8, 1・3・4), 底部の形は不明であるが、口縁部が外反し、断面形が三角形で、口縁部の内側がやや窪むものに分類できる (図8, 2・5)。成形は、細縄文と粗縄文による叩き成形であり、文様を施さない。口縁部の形態のうち、断面が三角形で、口縁部内側に窪みをもつものは、細縄文による叩き成形を施す。一方、断面が肥厚し三角形を呈するものは粗縄文で成形を施すという、断面形の相違による成形技法の使い分けが認められる。

表7 大黃沙遺跡5・6層

技法 器形	成形技法				施文技法			
	口縁・断面	素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し引き	透かし
釜			細縄文・粗縄文				竹管・貝割文	
罐								
鉢								
圈足鉢(盤)					○		刻割文	鏤孔
豆								
土器片								

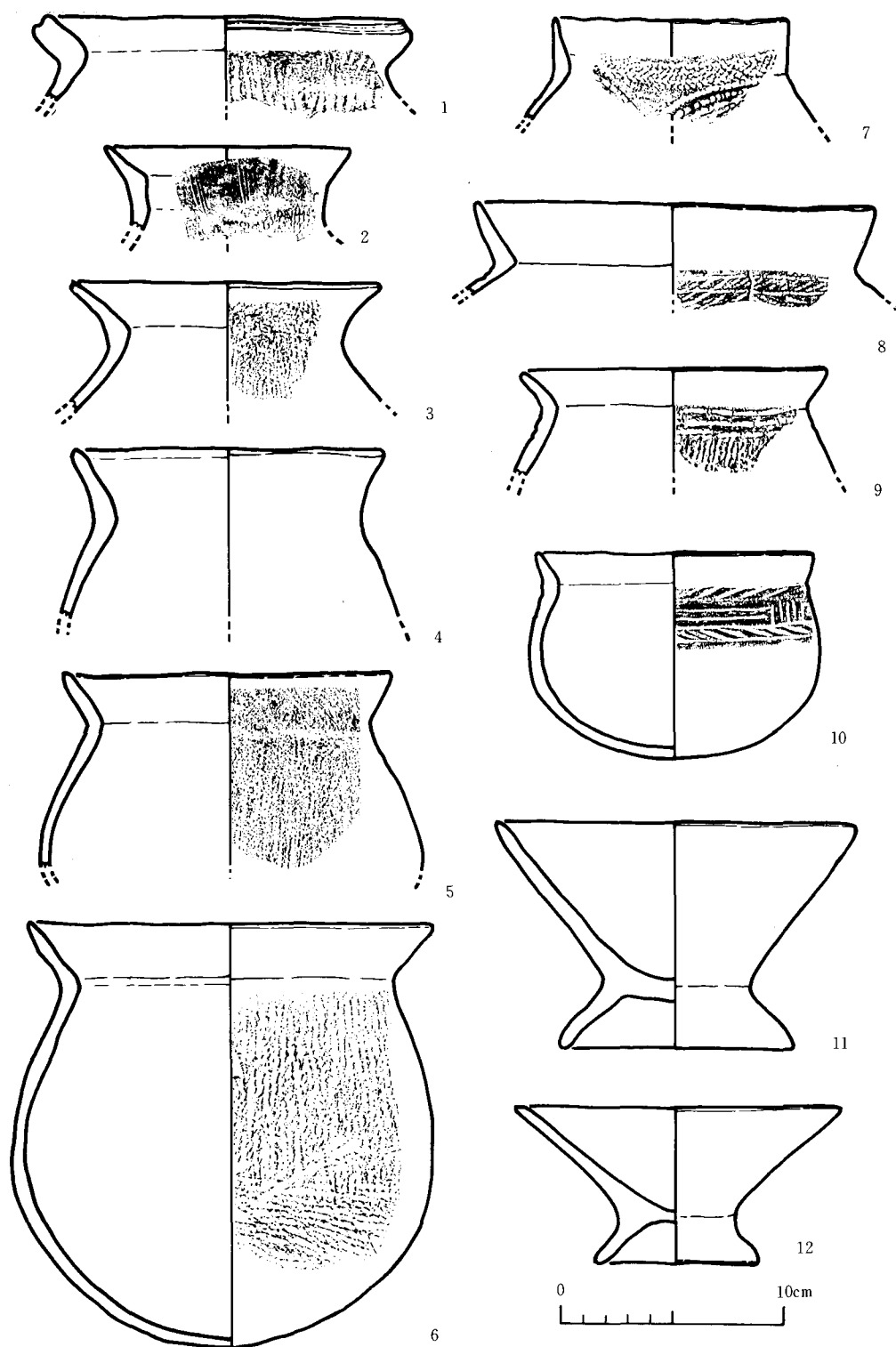


図5 威頭嶺遺跡出土土器（3）

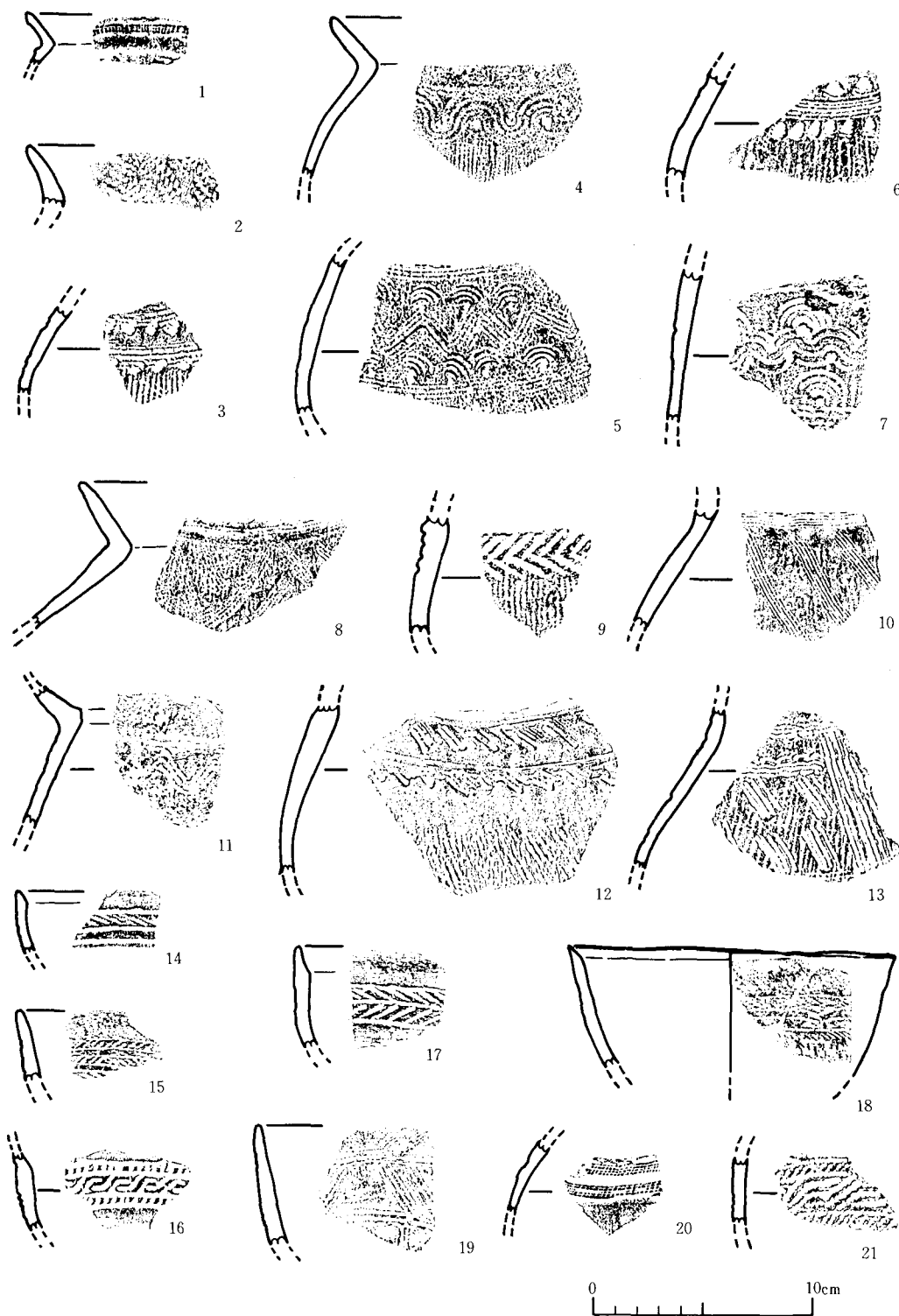


圖 6 咸頭嶺遺跡出土土器 (4)

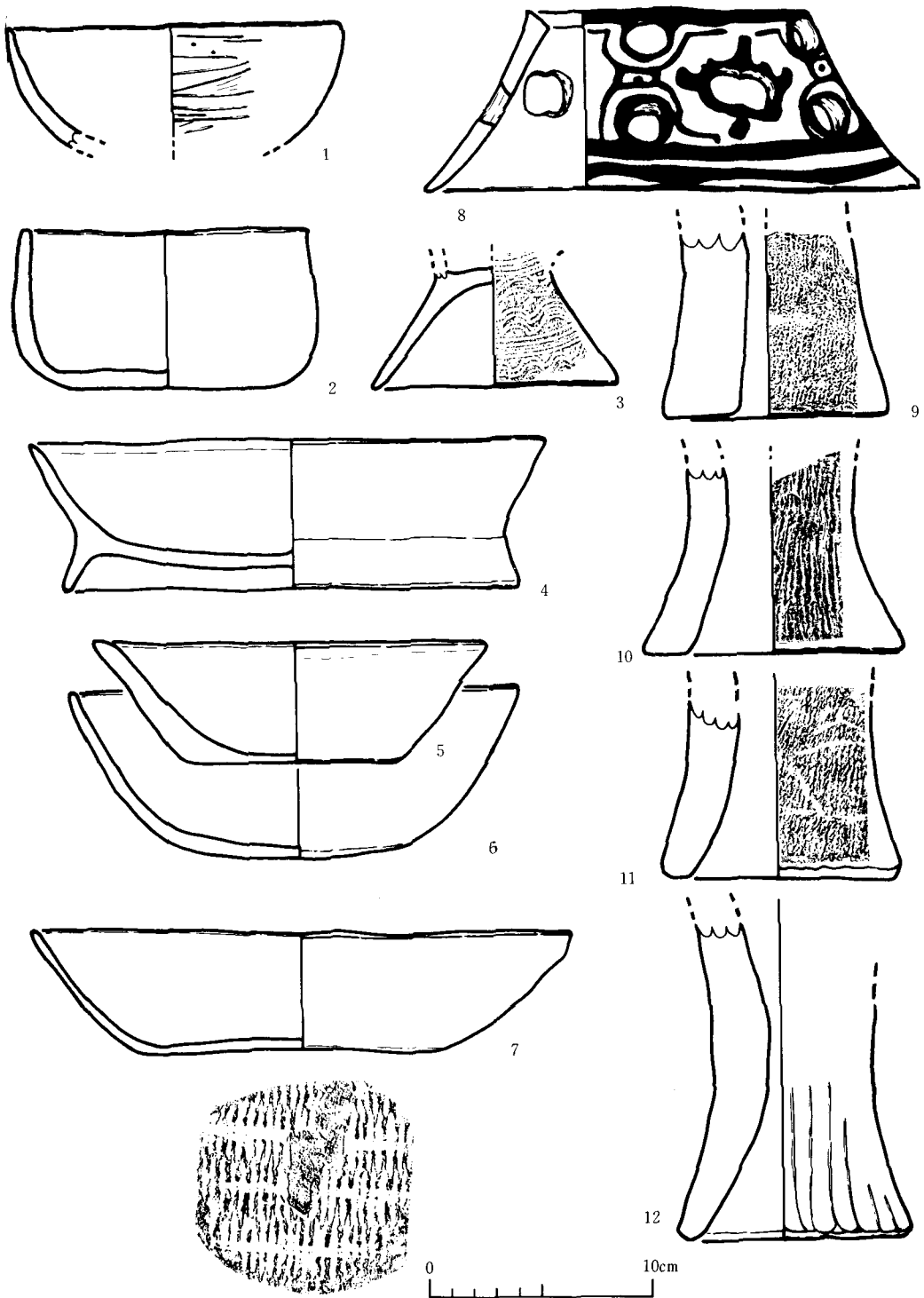


図7 威頭嶺遺跡出土土器 (5)

盤は、完形品が出土していない（図8，6～10）。身は鉢形で胴部が張り，口縁部はやや垂直気味に尖る。また身の底が平底になる（図8，6）。圈足部分が低く，上部がやや内反する（図8，7～10）。土器の胎土は泥質で，器面は丁寧に磨きを施したのち，圈足部の表面と裏面に刻劃文（ヘラ状工具による幅広沈線）と赤褐色の彩色を施す。盤の身の表面にも彩色が施される。圈足部の文様は，文様帯を上下2列に構成し，山形の刻劃文（沈線文）と鏤孔を施し，さらに，赤褐色の彩色をこの山形の刻劃文にそって施したもの（図8，7）。刻劃文で水波文と，鏤孔を施し，圈足部下部と裏面に彩色を施すものがある（図8，9・10）。身の文様は，赤褐色の彩色を施す。

4層土器群（図9・10，表8）

4層出土の土器の器種構成は釜・罐・鉢・盤・豆である。釜は，口縁部が外反し，その断面形が，逆L字形を呈し，おそらく胴部が屈曲せず，丸みをおびるもの（図9，1・2・5），口縁部が外反するか断面形が三角形を呈し，口縁部の内側がやや窪むものに分類できる（図9，3・4）。いずれの型式も底部が出土しておらず，その器形は不明であるが，釜と同様の胎土の土器片に，圈足や尖底の器形を有するものは出土していない。よっておそらく丸底と思われる。成形は，細縄文による叩き成形である。

5・6層出土の釜と同様に，口縁部の形態のうち，断面が三角形で，口縁部内側に窪みをもつものは，細縄文による叩き成形を施す。一方，断面が肥厚し，三角形を呈するものは，粗縄文で成形を施すという，器形による成形技法の使い分けが認められる。釜形の土器の胎土は，砂粒を多く含み，器壁が厚いことが特徴である。

罐で，底部まで復元された個体は出土していない。口縁部の形態から，肥厚せず外反するのものと（図9，6），口端部が尖り，ほぼ真っ直ぐに立ち上がるものに分類できる（図9，7・10）。文様は，刻劃文（沈線文）によって施文されるものと（図9，6～9），幅5～6mmの突帯を張り付け，その上部に刻目を施すものがある（図9，10～12）。7は，口縁部から肩部にかけて文様を施文している。残存部で4つの文様帯を構成し，その間を刻劃文で鋸歯文状の文様を施す⁽³⁾。8は，口縁部の文様は不明であるが，縄文で成形を施した後，肩部の成形痕を磨り消す。

表8 大黃沙遺跡4層

技法 器形	口縁・断面	成形技法			施文技法				
		素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し引き	刺突文	透かし
釜	A・三角・蒲鉾		細縄文・粗縄文						
罐							貝劃文(?)		
鉢							刻劃文		
圈足鉢(盤)					○				鏤孔
豆							刻劃文		
土器片									

そして上下に沈線を施し文様帯を構成し、その間を3つ半円を重ねた文様を3列施す。これら罐形の土器は、釜形の土器と比較して、胎土も緻密で焼成もよく、器壁も薄い。

13は、鉢と推定される土器である。底部の器形は不明であるが、胴部に刻劃文で文様を施す。

15は、豆の圈足部で、下部に刻劃文で施文する。

2層土器群（図11・12・13、表9）

2層の器種構成は釜・罐・鉢・盤・豆・器座である。釜の器形は、口縁部が肥厚せず外反し、先端部がやや尖るものと（図11、2～4）、口縁部が肥厚し、逆「L」字形を呈するもの（図11、1・5）、肥厚した断面が三角形で外反するものの（図11、6～10）3種に分類できる。4層、5・6層で出土した釜と同様に、口縁部の形態のうち、断面三角形で、口縁部内側に窪みをもつものは、細縄文による叩き成形を施す。一方、断面が肥厚し、三角形を呈するものは、粗縄文で成形を施しており、器形による成形技法の使い分けが認められる。胴部はおそらくふくらむが、屈曲はせず、底部は丸底であろう。釜の成形は、細縄文と粗縄文による叩き成形である。文様は施さない。

釜形の土器の胎土は、砂粒を多く含み、器壁が厚いことを特徴とする。

罐は、口縁部の形態から、肥厚せず外反し、口端部が尖り、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる（図13、1・2）。

文様は、刻劃文（沈線文）によって施文されるものと、幅5～6mmの突帯を張り付け、その上部に刻目を施すものがある。図13の6・7・9・10・13は、おそらく罐形で、縄文で成形を施した後、肩部の成形痕を磨り消す。そして上下に沈線を施し文様帯を構成し、その間を貝劃文で山形・横「ハ」字状の文様を施す。これら罐形の土器は、釜形の土器と比較して胎土は緻密で、焼成はよく、器壁も薄い。

図12の2～4・6は、文様を施さない鉢で、底部の器形は不明である。図12の5は、圈足付鉢

表9 大黃沙遺跡2層

技法 器形	口縁・断面	成形技法			施文技法				
		素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し引き	刺突文	透かし
釜	A・三角・溝鉢		細縄文・粗縄文						
罐							貝劃文(?)		
鉢		○					刻劃文		
圈足鉢							刻劃文		
盤							刻劃文		鏤孔
豆							刻劃文		
器座			細縄文・粗縄文				刻劃文		
土器片						扇貝印文	刻劃文		

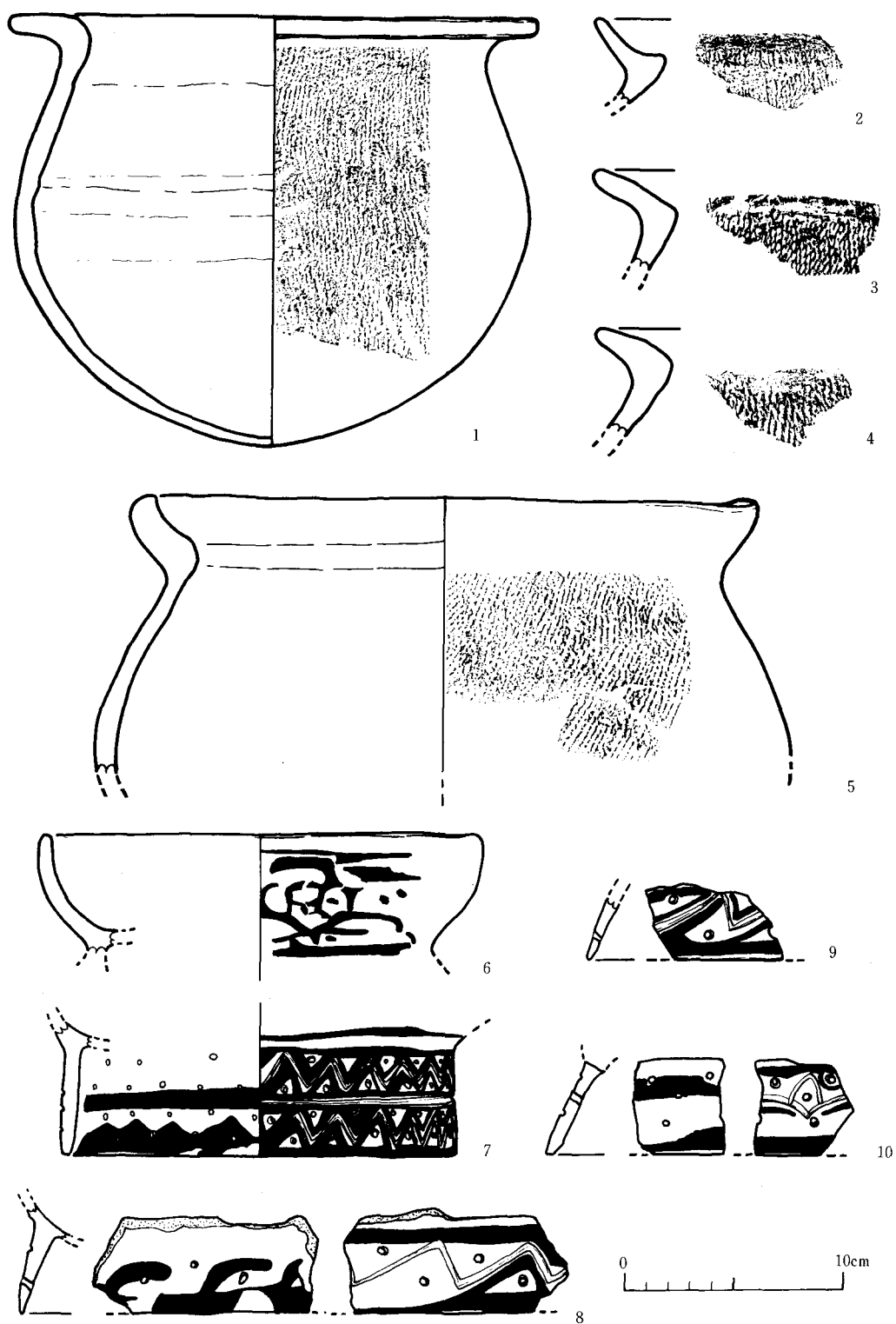


圖8 大黃砂遺跡5・6層出土土器

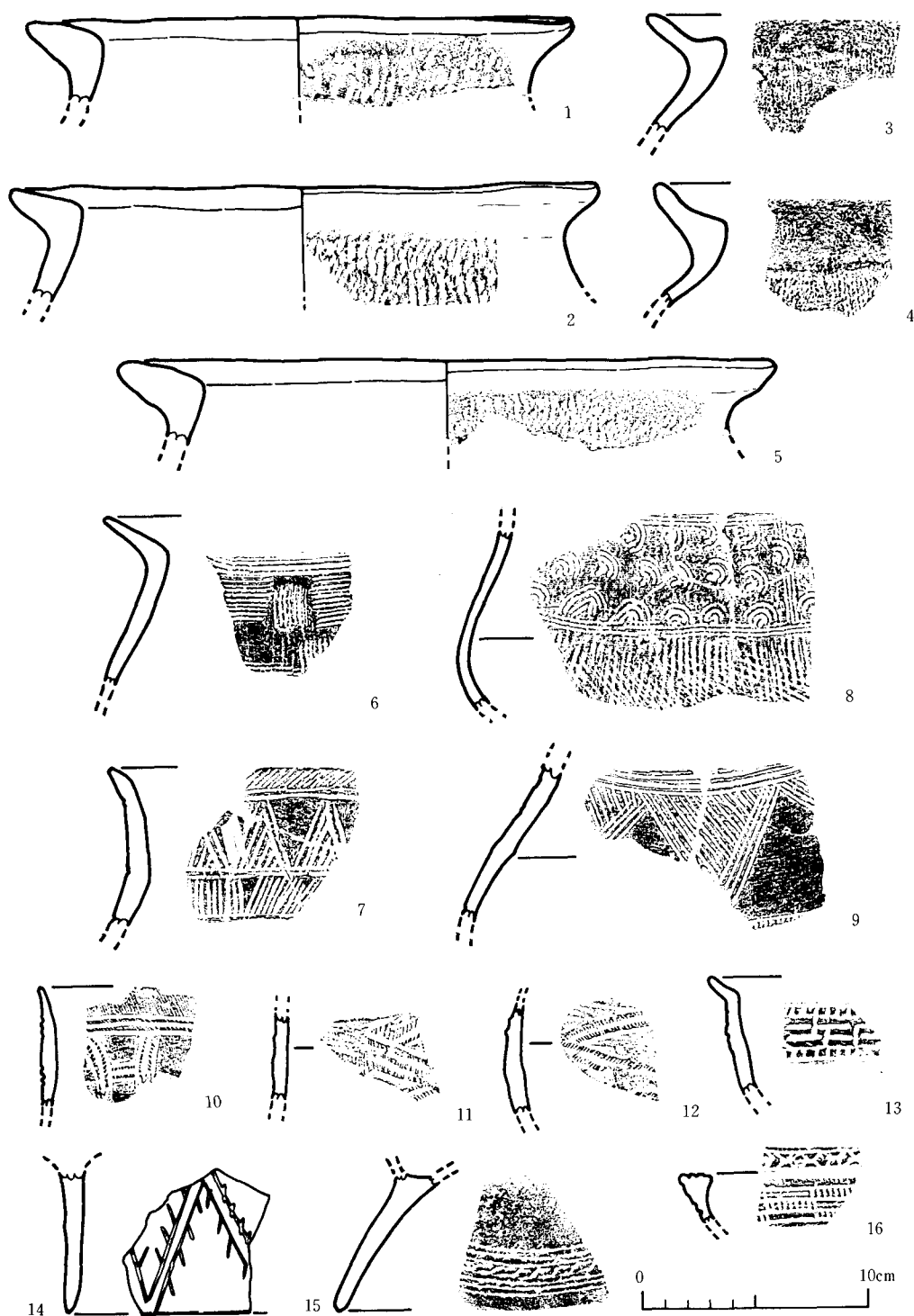


図9 大黃砂遺跡4層出土土器

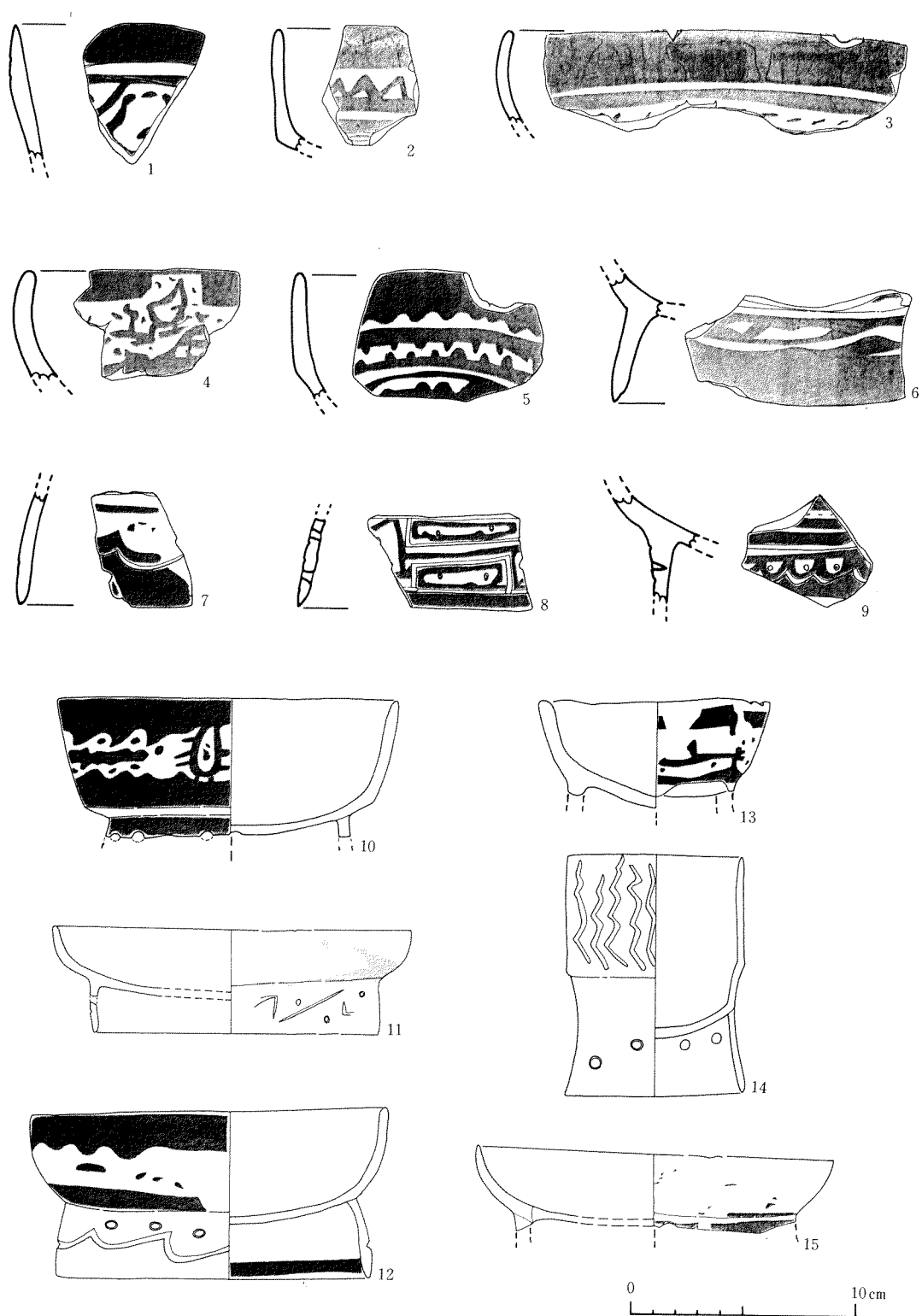


図10 1～9大黄沙遺跡出土彩陶 10～15春坎湾遺跡出土彩陶

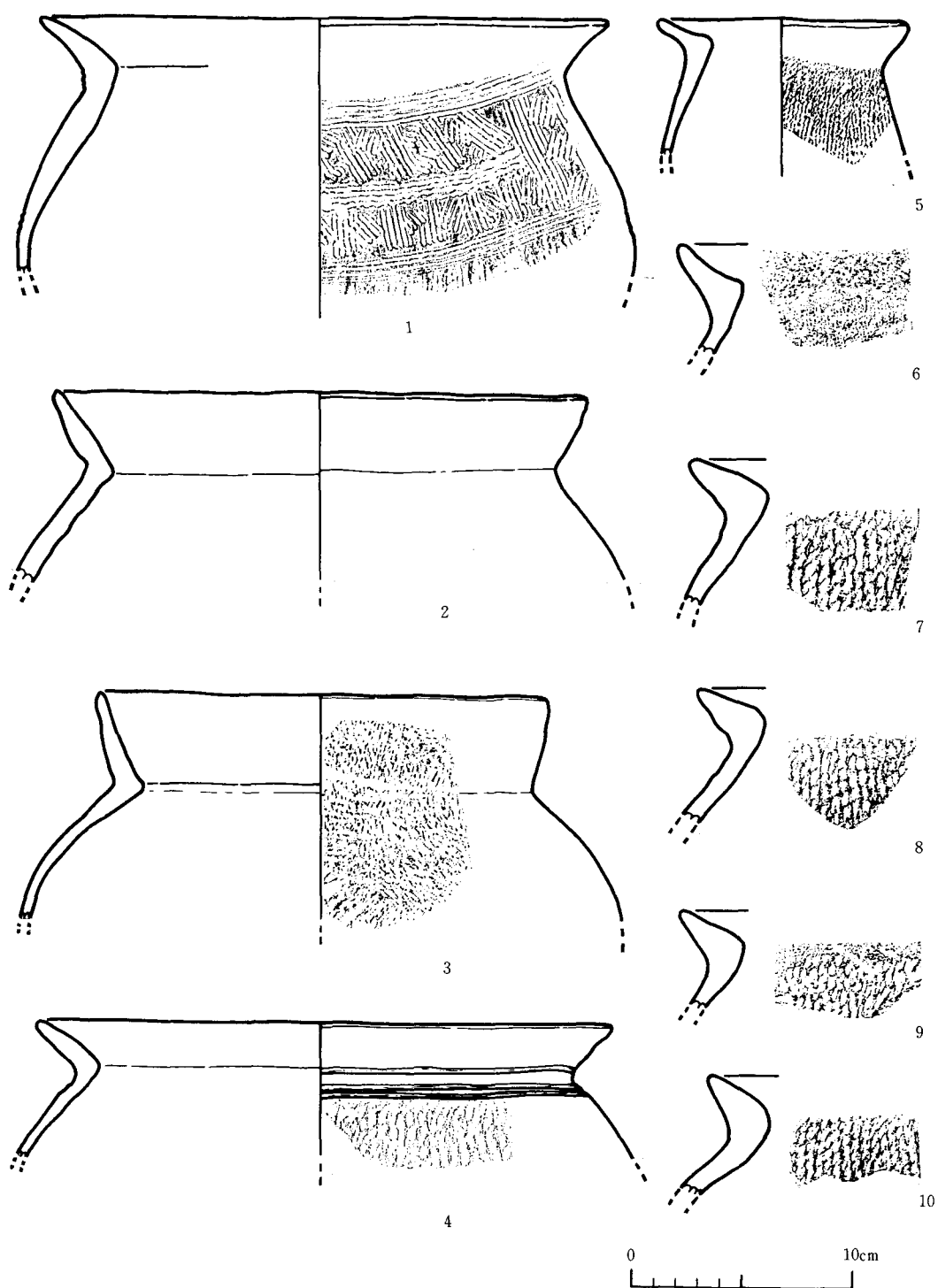


図11 大黃砂遺跡 2層出土土器 (1)

で、身の口縁部下部の表面に、刻劃文を施す。

図13の14～19は、いずれも白陶で、器壁が4～5mmと非常に薄く、胎土も緻密で焼きしまりがよい。19は、圈足部で、横方向の刻劃文（沈線）の間に、円圈戳点文（竹管による刺突文）、および斜め方向の刻劃文で施文する。

以上、各層位ごとの土器群の分析をおこなった。各層の土器群間には、明瞭な特徴があり、変遷をたどることができる。

後沙湾遺跡（広東省博物館1990・珠海博物館他1991）

遺跡は、珠江口の西側に位置し、面積約16m²の淇澳島の東北部の後沙湾に所在する。この湾は南北が直径約400mの半月形を呈しており、東南方向に開く。遺跡は、湾の海岸線から約20m離れ、海拔約4.5mの海岸砂丘上に立地し、砂丘の背後には、山地が控え、小河川が湾に向かって注ぐ。

遺跡は、1984年表面調査の際発見され、その後、1985年と1989年の2回にわたって発掘調査がおこなわれた。発掘面積は、地表面で108m²、掘り下げたグリッドの底部で約50m²を測る。

遺跡の層位は、大きく6層に分層できる、2・4層と6層が新石器時代の層で、6層が第1期文化、2・4層が第2期文化に比定される。

第1期文化の土器群（図14、表10）

出土土器の器種構成は、釜が全体の24%を占め、罐12%、鉢5%、盤59%の比率である。煮沸用器種である釜に対して、盤の比率が高い点を特徴とする。

釜の器形および断面形は、底部まで復元された土器がないため、全体の器形は不明である。胴部まで復元された釜の器形から推測すると、口縁部が外反し、胴部は屈曲を持たないと思われる（図14、7・8）。

成形は、細縄文による叩き成形であり、文様を施さない。文様を施すものは、煮沸用以外の罐・鉢・盤・豆で、いずれも土器の胎土は泥質で叩きによる成形は認められない。施文方法に、彩色・貝殻圧印（貝殻腹縁による圧痕文）・刻劃文・鏤孔文があるが、鉢に、口縁部に2条の帯状

表10 後沙湾1期

技法 器形	口縁・断面	成形技法			施文技法				
		素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し引き	刺突文	透かし
釜			細縄文						
罐									
鉢					○				
圈足鉢(盤)					○	貝殻圧印	刻劃文		鏤孔
豆							刻劃文		
土器片				条文					

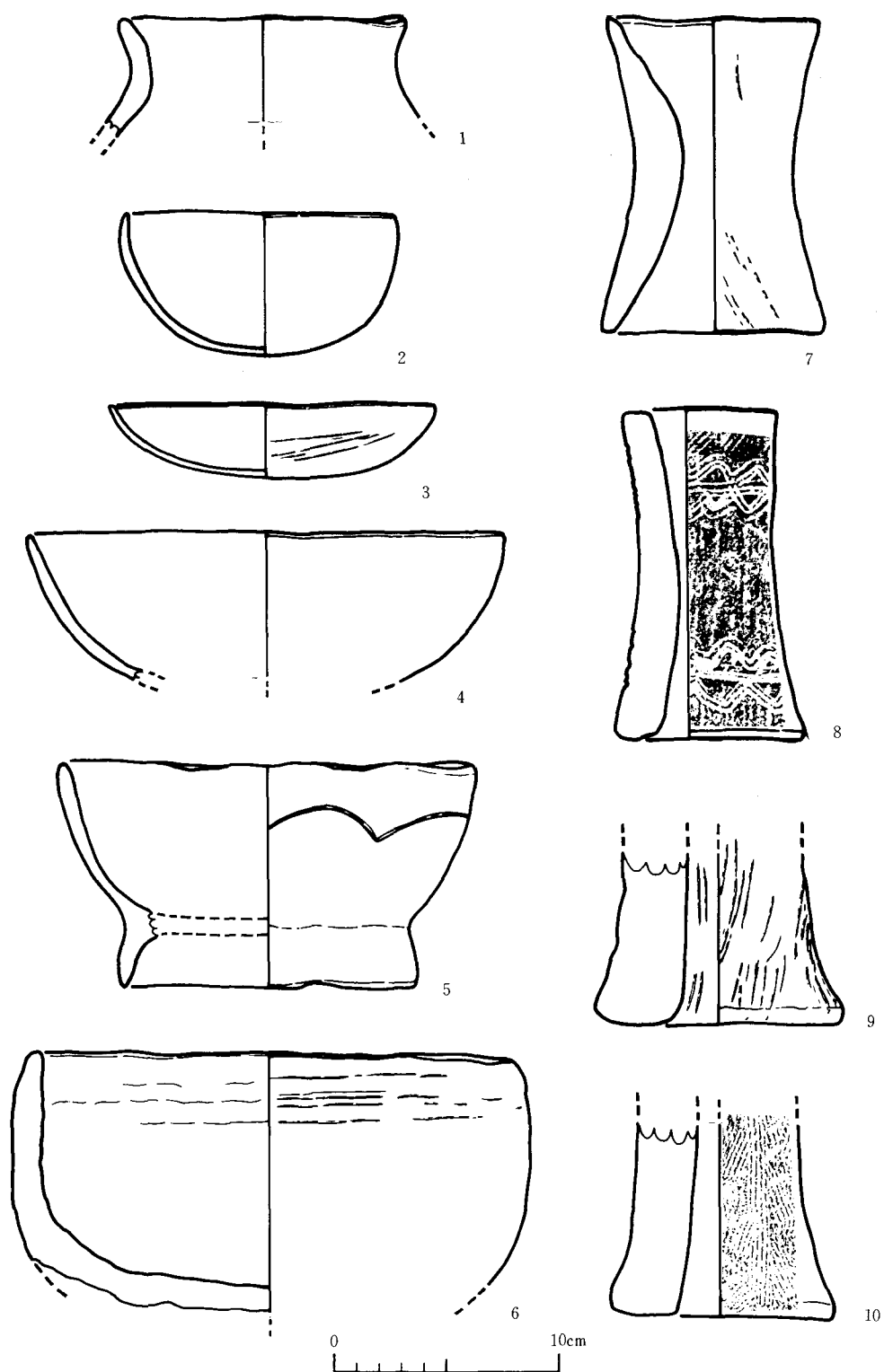


図12 大黃砂遺跡 2層出土土器 (2)

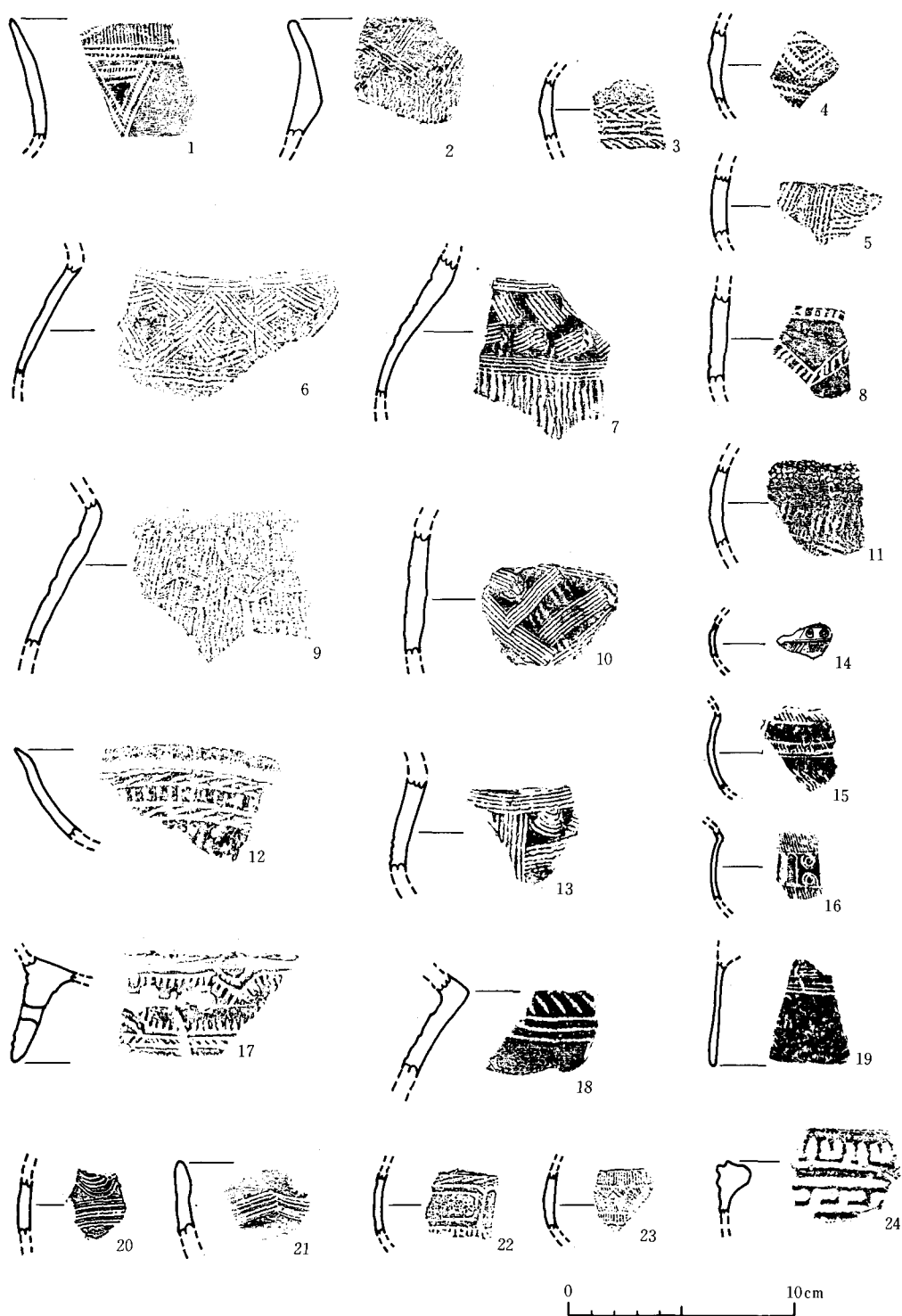


圖13 大黃沙遺跡 2 層出土土器

の彩色する以外は、すべて盤に、この4種類の施文技法で施文することを特徴とする。

盤は、報告書では、器形によって、A・B・Cの3つの型式に分類している。

A型は、盤の身が鉢形で、胴部が張り、口縁部はやや垂直気味に尖る（図14, 13～15）。また身の底が平底になる。圈足部分が低く、上部がやや内反する。圈足部の直径に対して、身の直径が大きい。B型は、圈足部が高く、その高さは6cm以上を測る（図14, 16・17）。C型は、白陶で、圈足はラッパ上に広がり、身の口縁部は、内反する（図14, 18）。胴部は鉢形である。器面に白色のスリップを施し、身と圈足部に彩色と刻劃文（ヘラ状工具による幅広沈線）を施す。圈足部に、彩色と波紋・刻劃水波文・彩色水波文）を施す。

第2期文化（図16, 表11）

出土土器の内、復元された個体は少数のため、正確な器種構成は把握されていない。しかし、器種構成からみると、釜が占める比率が高く、1期で顕著であった盤は出土していない。また、2期であらたに加わる器種としては、圈足罐があげられる（図16, 19）。1期では、釜は口縁部が外反し、胴部に屈曲をもたない器形が大半を占めたが、2期では大きく口縁部の断面形から内反するものと、ほぼ直立するもの、それに外反するものの3種に分類できる（図16, 14～17）。

土器成形は、縄文による叩き成形が主である。1期では、煮沸用以外の罐・鉢・圈足鉢（盤）・豆に施文を施すが、2期で、釜に施文を施す。施文部位は、口縁部から肩部にかけてで、施文方法は、刻劃文・戳点文（竹管状工具による刺突文）、刻劃凹弦文（幅広沈線文）である。

表11 後沙湾2期

技法 器形	成形技法				施文技法				
	口縁・断面	素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	压痕	沈線文・押し引き	刺突文	透かし
釜				方格曲線			刻劃・刻劃凹弦	戳点文	
罐圈足		○		曲折					
鉢									
圈足鉢(盤)									
豆									
土器片			条文・長方格・葉脈・曲折・雲雷・方格条文			刻劃	印		鏤孔

草堂湾遺跡（珠海博物館他1991）

遺跡の立地する三竈島は、珠江市の西南約30kmに位置する。珠江口西部地域において最大の島で、面積は50km²を計る。島の地形は低山で、多くの小河川が、海に向かって注ぐ。草堂湾遺跡は、この島の東部、三竈鎮から東に5kmほどはなれた地点にある、南北1.5km湾の砂丘上に所在する。砂丘の幅は、200～250mを測り、その西側は、現在水田になっている。遺跡は海岸から約180m内陸部に入った、海拔標高約6mの位置に立地するが、その西北側は、砂取りのため

破壊されている。

遺跡は1985年、表面調査の際発見され、その後、1989年発掘調査がおこなわれた。発掘面積は、地表面で1458m²、掘り下げたグリッドの底部で約65m²を測る。

遺跡の層位は、大きく6層に分層され、3層と5・6層が新石器時代の層で、5・6層が第1期文化、3層が第2期文化に比定される。

第1期文化 (表12)

出土土器の器種構成は、釜が全体の約70%を占め、罐3.8%、圈足鉢(盤)17.3%の比率である。煮沸用器種である釜の比率が、他の盛食器の比率に対して高い点を特徴とする。

報告書によると、釜はその施文方法から3型式に分類されている。器形および断面形からは、1種類に分類され、その特徴は口縁部が外反し、胴部の屈曲をもたない丸底の器形である。

釜の成形は、細縄文による叩成形が主であるが、叩板刻目による成形もある。文様は、煮沸用の釜に施され、それ以外の器種で文様を有するのは、盤の圈足部分に鏤孔を施すものだけである。

釜の施文部位は、口縁部から肩部にかけてで、施文方法は、刻劃文・刻劃凹弦文(幅広沈線文)・貝歯文(貝殻圧痕文)である。文様は、刻劃凹弦文によって、水波文を施し、その下部に円文を施すもの、貝歯文によって、口縁部と胴部の屈曲部付近に、2条の平行線を施し、肩部にも山形状の文様を施すもの、肩部に平行に貝歯文を連続させて施文するものがある。

盤は、身が鉢形で胴部が張り、口縁部はやや垂直気味に尖る。また身の底が平底になる。圈足部分は低く、上部がやや内反する。圈足部の直径に対して、身の直径が大きくなる。

表12 草堂湾1期

技法 器形	成形技法				施文技法				
	口縁・断面	素文	縄文による 叩き技法	叩板刻目による 成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し 引き	刺突文	透かし
釜			交錯細条文	条文		貝歯文	刻劃文・凹 弦文・刻劃 水波文		
罐									鏤孔
鉢									
圈足鉢(盤)									
豆									
土器片			縄文・細縄文	条文				戳点文	

第2期文化 (図16, 表13)

出土土器の器種構成は、釜が全体の約52%を占め、鉢12%、罐4%、豆8%、器座3%の比率である。煮沸用器種である釜の比率が、他の盛食器の比率に対して高い点を特徴とする。

釜は、報告書では、その施文方法から3型式に分類されている。器形および断面形からは、口縁部が外反し、断面が蒲鉾形を呈し、胴部の屈曲をもたない丸底のものと、口縁部がほぼ垂直に

立ち、口唇部が尖るものに分類できる。1期の釜の特徴であった、口縁部の先端が尖りながら外反する器形は認められない。

釜の成形は、縄文による叩き成形で、胴部は縄文を交差させる交錯縄文である。罐の胴部にも、交錯縄文の成形痕が残る。1期では、釜に圧痕技法である貝歯文、沈線文である凹弦文・刻劃文が施文されたが、2期ではこれらの施文方法は、まったく認められない。

豆は無文で、身は丸底の鉢形。、圈足部はラッパ状に広がる。

表13 草堂湾2期

技法 器形	口縁・断面	成形技法			施文技法				
		素文	縄文による叩き技法	叩板刻目による成形技法	彩色	圧痕	沈線文・押し引き	刺突文	透かし
釜			交錯条文						
罐			交錯条文						
鉢		○							
圈足鉢(盤)									
豆		○							
土器片			○	条文・長方格文・方格文・曲線文					

3 編年

以上各遺跡から出土した土器群の分析をおこなったが、まず問題点と編年案を提示したい。

近年の新石器時代から青銅期時代の編年として、朱非素と楊式挺の編年案があげられる。朱非素は、広東省の新石器時代を早・中・後期に分期している（朱1984）。楊式挺は、新石器時代を、早期（西樵山細石器）、中期（西樵山一期文化）、晚期（西樵山二期文化）に分期している（楊1985・1986）。

1980年代末から1990年代に香港、珠海、深圳、東江流域でおこなわれた発掘の成果によって、重層遺跡の発見が相次ぎ、各遺跡で遺構と遺物群の把握が可能になり、より詳細な編年がおこなわれるようになる。しかし、研究者によって、編年案は異なっており、統一された編年はまだ確立していない。

朱非素は、砂丘遺跡でもっとも時期の遡る遺跡を、後沙湾遺跡1期とし、草堂湾遺跡1期が後続するとしている（朱1991）。李子文は、珠海の後沙湾・東澳湾・草堂湾・亜婆湾遺跡の遺物を分析し、新石器時代を「後沙湾遺存Ⅰ・Ⅱ期」の2時期に、新石器時代晩期から商周時代併行期二かけての時期を「東澳湾遺存Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期」の4時期に分期した。そして出土土器のうち、主として釜と盤の器形に着目して、後沙湾遺存Ⅰ期＝後沙湾遺跡1期（6層）土器群→後沙湾遺存Ⅱ期＝草堂湾遺跡1期（6層）→東澳湾遺存Ⅰ期＝後沙湾遺跡2期（2層）→東澳湾遺存

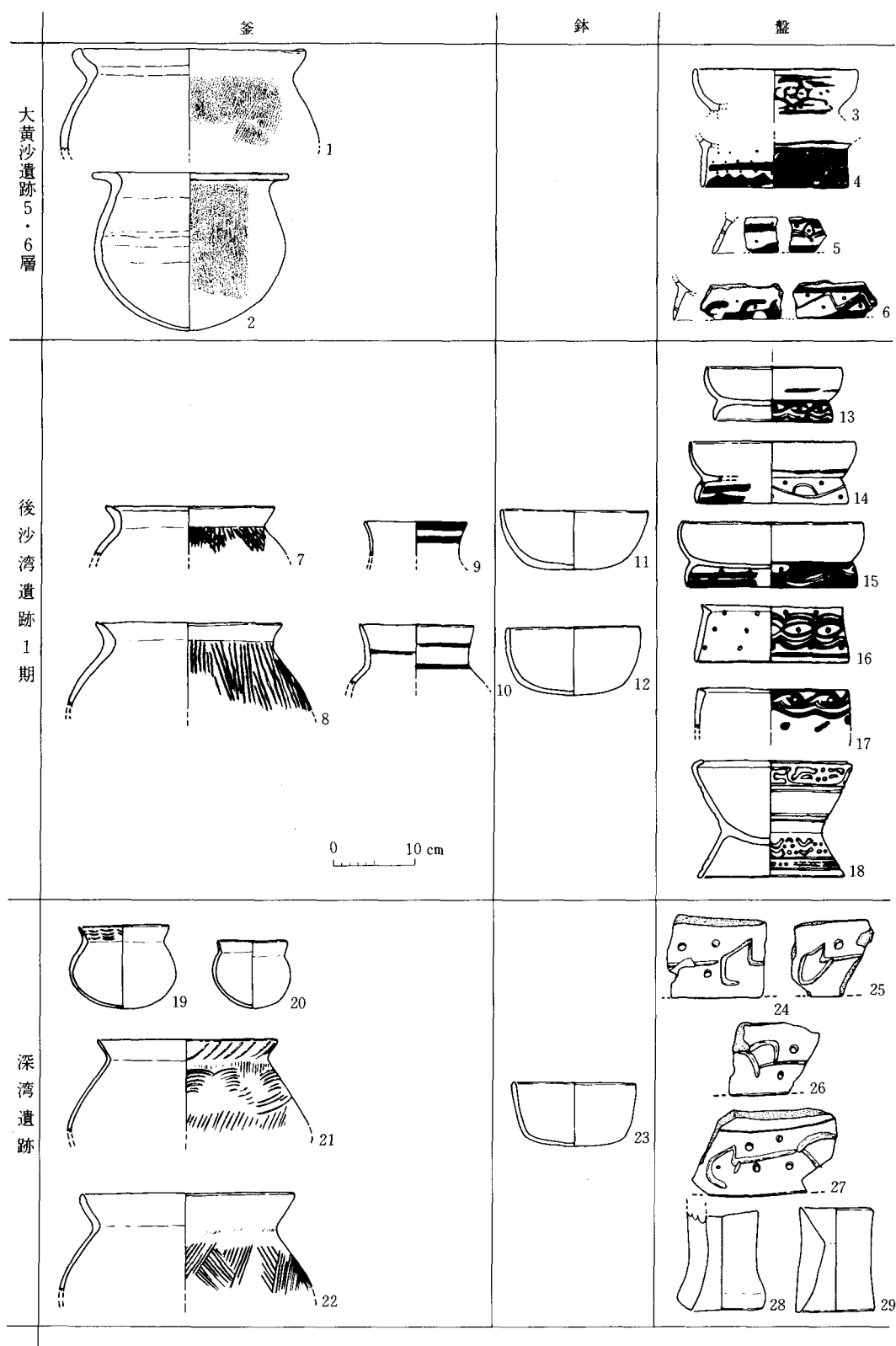


圖14 廣東省土器編年 I 期

Ⅱ期＝草堂湾遺跡2期（2層）という編年を提示した。さらに草堂湾遺跡1期（6層）と、咸頭嶺遺跡の土器のうち、釜・盤の器形と、表面に施される文様に類似するものがあることから、各時期の遺跡層位ごとの時期的な変遷を、大黄沙遺跡4層・後沙湾遺跡Ⅰ期→咸頭嶺遺跡→大黄沙遺跡2層・草堂湾遺跡Ⅰ期と考えた。さらに新石器時代の実年代を4000～3000B. C. に、夏商時代を2000～1000B. C. に比定している（李1991）。

殷文明は、1990年以前の研究を総括して、新石器時代から青銅器時代早期を4期に時期区分している（殷1991）。1・2期を、新石器時代とし、1期は後沙湾遺跡Ⅰ期を標準遺跡とし、大黄沙・小梅沙遺跡をこの時期に比定する。2期は水涌遺跡1期を標準遺跡とし、草堂湾遺跡Ⅰ期・深湾遺跡F層をこの時期に比定している。3期は東湾遺跡を標準し、後沙湾遺跡Ⅱ期・竈崗遺跡・水涌遺跡2期・茅崗遺跡をこの時期に比定している。そして、3期は、すでに青銅器時代初期段階であるとする。

鄧聰は、珠江デルタ地域の遺跡を土器研究からだけでなく、遺跡の立地、石器組成等の分析や、当時の生態環境まで言及し、珠江デルタ地域の新石器時代中期を「大湾文化」と位置づける（鄧聰・黄韻璋1994）。このなかで、遺物の編年をおこなう方法として、層ごとに一括遺物として把握できる土器・石器の遺物群を「組」として理解しようとする。これは、従来のように個々の土器を縦の時系列に並べるのではなく、構造的に遺物を理解しようとする方法であり、画期的な方法であった。そして、咸頭嶺組・大黄沙組・後沙湾組・蜆殼州組・深湾組の5つの「組」を設定した。これら「組」間の編年を、編年が確立し、しかも珠江デルタ地域の中期土器文化に大きな影響を与えたと考えられる大溪文化と比較することによって構築しようとした。咸頭嶺遺跡からは典型的な盤に彩色を施す「大湾式彩陶」が出現せず、表面に附加堆文を施し、櫛齒文（刻目）を施す白陶が出土する。このことから、咸頭嶺遺跡の土器群を大溪文化の早期に比定している。そして、大黄沙遺跡4層土器群の時期に出現する典型的な大湾式彩陶盤が、大溪文化の関廟山類型第二期の彩陶碗の文様と類似することに注目して、大黄沙遺跡4層が咸頭嶺遺跡の土器群に後続するものとする。同様に以下のように、大溪文化との併行関係を見いだしている。

咸頭嶺 → 湯家崗遺跡早期墓

大黄沙4層 → 大溪文化二期・仰韶文化廟底溝類型

後沙湾遺跡 → 大溪文化三～四期

深湾 → 大湾文化晚期

このように、新石器時代中期から晩期にかけての編年は、各研究者によって異なっている。

さて、土器編年を再考するに際して、まず大黄沙遺跡の土器群を参考としたい。大黄沙遺跡出土の土器群を、その出土層位から、時間が遡る順に、5・6層、4層、2層の3時期に分期できる。大黄沙遺跡5・6層からは、彩陶盤が出土しているが、その器形は身が鉢形で胴部が張り、口縁部はやや垂直気味に尖り、身の底は平底で、圈足部分が低く、上部がやや内反している。圈足には、刻劃文で水波文と鏤孔を施し、圈足部下部と裏面に彩色を施す。これと同形式の彩陶盤

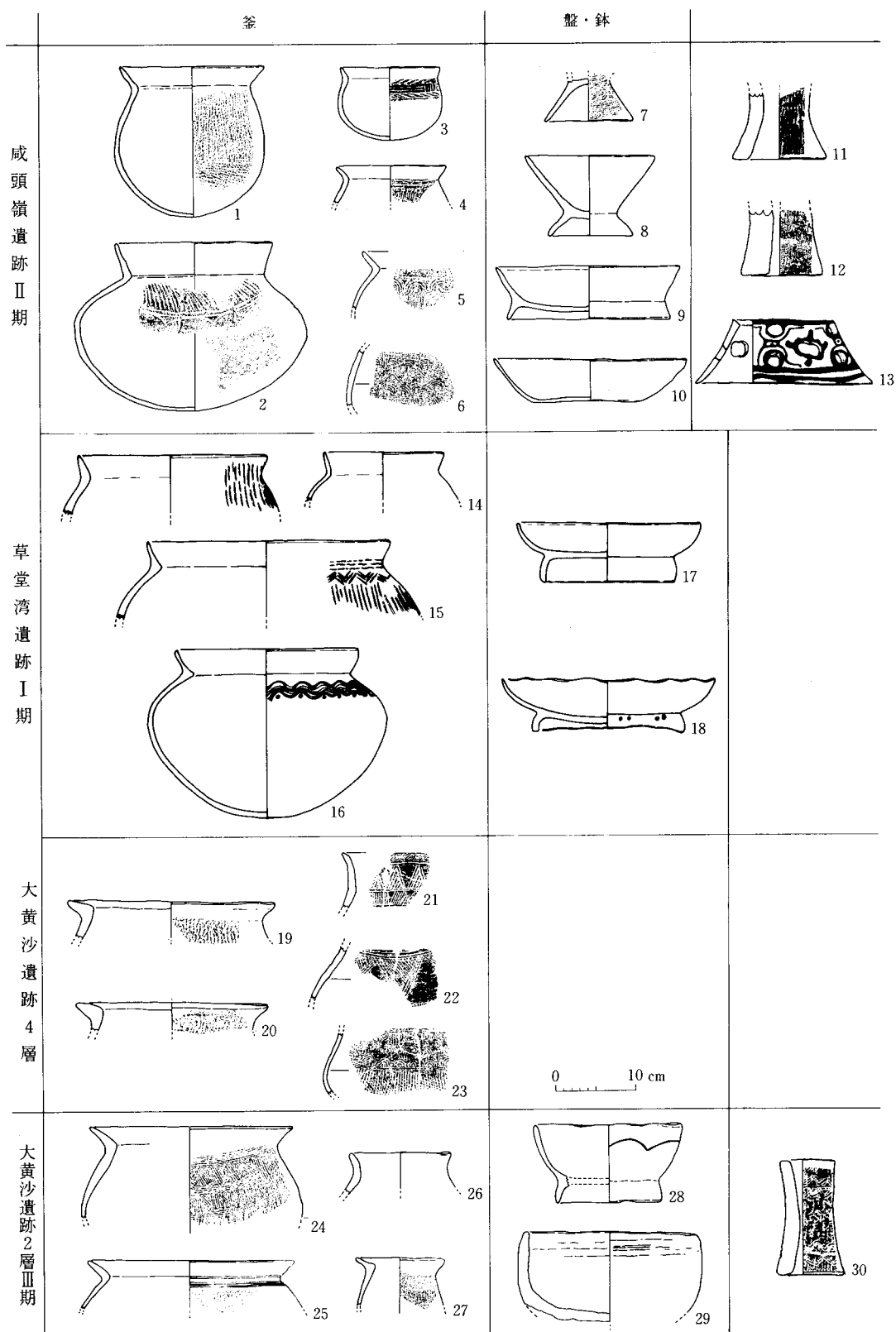


圖15 廣東省土器編年 Ⅱ・Ⅲ期

が、大黄沙遺跡5・6層以外に、後沙湾遺跡6層（1期）・深湾村遺跡で出土している（図14，E・8・9）。このことから、後沙湾遺跡1期・深湾村遺跡と大黄沙遺跡5・6層は、時期的にほぼ並行するものと考えられる。

また盤以外でも、大黄沙遺跡5・6層と後沙湾遺跡1期で、口縁部が外反し、断面形が三角形で、口縁部の内側がやや窪む釜が出土している（図14，1）。この釜の成形は、細縄文と粗縄文による叩き成形であり、文様を施さない。しかし、同時期に比定した深湾村遺跡出土の釜は、口縁部が肥厚せず外反し、先端部がやや尖っており、しかも口縁部および肩部に沈線文が施されており型式が異なる。この相違については、後述する。まず、この後沙湾遺跡1期・大黄沙遺跡5・6層・深湾村遺跡を、時期的に並行するものとして把握したい。

次に、大黄沙遺跡4層出土の土器群のうち、釜または罐の胴部の破片で、胴部と肩部に沈線で文様帯を設け、ここに竹管または、貝殻腹縁で、3列に重半圈文を施すものが出土する（図15，23）。咸頭嶺遺跡においても、やはり釜形で、肩部に沈線で文様帯を設け、その間を貝殻腹縁で、重半圈文に山形文を加え、3列に文様を施すものが出土している（図15，6）。このことから、大黄沙遺跡4層と、咸頭嶺遺跡の土器は、時期的にほぼ並行するものとする。

さらに、草堂湾遺跡1期（6層）では、口縁部が外反し胴部の屈曲をもたない丸底の釜で、肩部に水波文を施し、その下部に円文を描くものが出土する（図15，16）。これと同様の文様を施文する土器片が、咸頭嶺遺跡からも出土している（図15，5）。咸頭嶺遺跡と、草堂湾遺跡出土の土器を比較すると、彩陶を施さない盤の器形が共通すること（図15，9・17）、文様は異なるが、肩部に貝殻腹縁の圧痕で施文を施すもの（図15，2・15）がみられること、圈足の肩部に沈線と「z」状の沈線を施すものがみられることなど、共通の要素を抽出することができる。よって咸頭嶺遺跡・草堂湾遺跡1期（6層）・大黄沙遺跡4層の土器群は、時期的に併行すると考えられ、これら3遺跡を指標としてⅡ期としたい。

大黄沙遺跡4層と大黄沙遺跡2層の土器群は、層位的にみて、2層土器群が4層土器群に後続するが、形式的にも時間差が認められる。4層からは、釜または罐の胴部の破片で、胴部と肩部に沈線で文様帯を設け、その間を3列に重半圈文を施すものや、沈線文で山形の文様を施すものが出土する（図9，6～9）。この土器は、2層では出土しておらず、代わって肩部に文様帯を構成するものの、その間は、山形・横「ハ」字状の文様を施すものがみられる（図13，6・7・9・10・13）。これは、4層の土器文様が変化したしたものとして捉えられる。よって大黄沙遺跡2層をⅡ期に後続するⅢ期としてとらえたい。

草堂湾遺跡2期と後沙湾遺跡2期が、李子岩と嚴文明が提唱するように、Ⅲ期に後続するものと考えられる。後沙湾遺跡2期では、いわゆる印紋陶が増加する。草堂湾遺跡2期をⅣ期、後沙湾遺跡2期をⅤ期としたい。

今回設定したⅠ～Ⅲ期の編年案に対して李子岩は、その時期的変遷を大黄沙遺跡4層・後沙湾遺跡1期→咸頭嶺遺跡→大黄沙遺跡2層・草堂湾遺跡1期とした。鄧聰は咸頭嶺遺跡（湯家崗遺

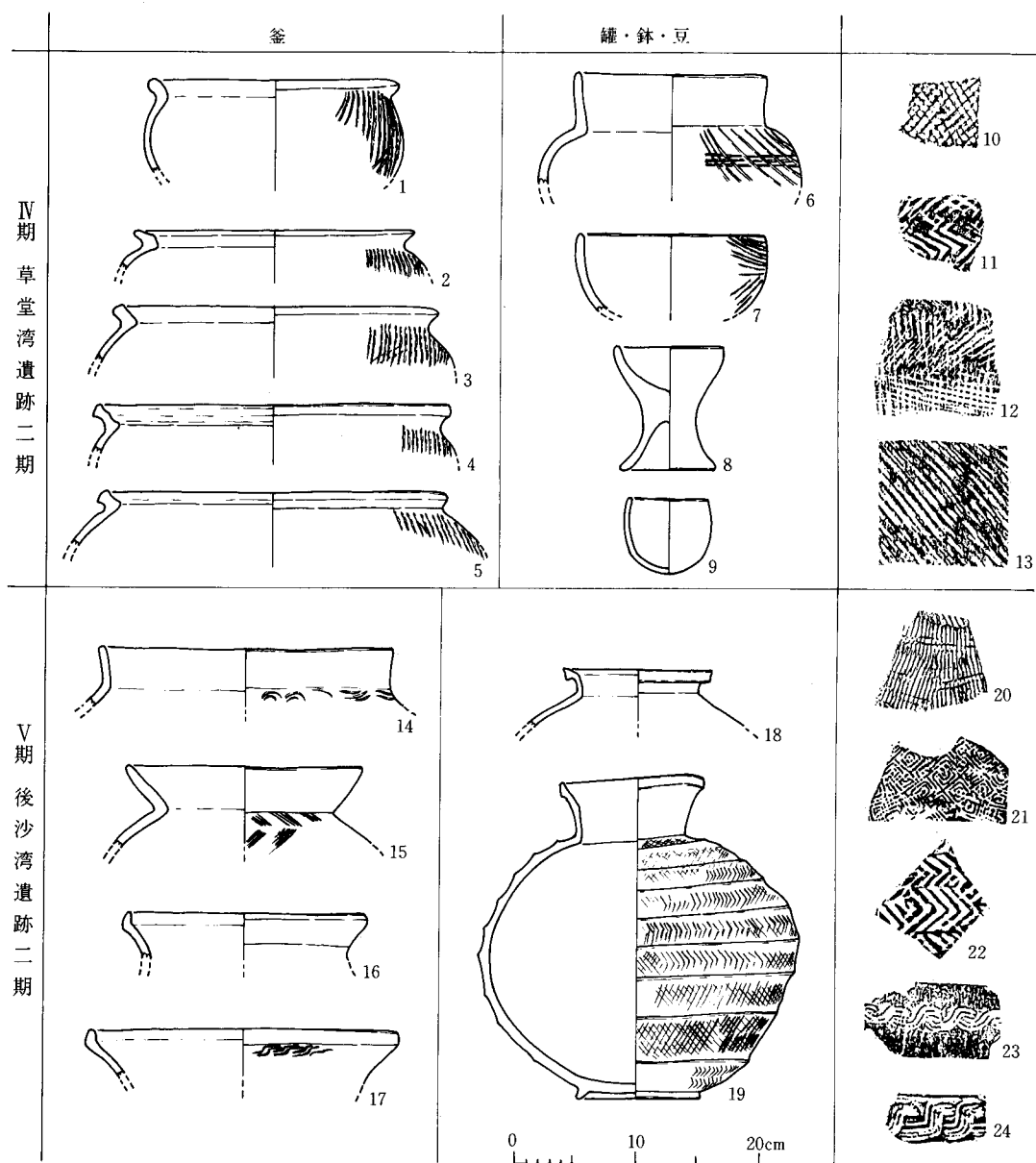


図16 広東省土器編年 IV・V期

跡早期墓に比定) → 大黄沙遺跡4層(大溪文化二期・仰韶文化廟底溝類型に比定) → 後沙湾遺跡(大溪文化三~四期に比定) → 深湾村遺跡(大湾文化晩期に比定)として捉えた。いずれも、珠江デルタという地域枠をまず設定したうえで、1時期に1つの土器型式が存在することを前提条件としたこと、そして彩陶の出現と消滅を代表とするように、各遺跡の土器群を、系列的な時系列の前後関係として捉えようとしたことに、この時期の編年上の問題が存在したと考えられる。

しかし今回の編年でも、問題点は残る。第一に層位ごとに土器群が把握できる遺跡数が少ない

ことがあげられる。また、Ⅰ～Ⅲ期の編年案を構築するうえで重要な指標となる、咸頭嶺遺跡は文化層の堆積が厚く、時期幅があると考えられことも留意すべき点であろう。さらにⅣ・Ⅴ期にかけては遺跡数自体が特に少なく、編年上まだ十分と言えないことが問題としてあげられよう。また特にこの時期広東省北部の石峡文化と時期的な関係が問題になる。石峡文化は、1期から3期に分期される（石峡発掘小組1978・朱1988・楊1989・後藤1994）。1期は前石峡文化とされ、罐と圈足盤が特徴で、草堂湾1期に類似するという。2期は、石峡文化層で1期～3期の墓葬に相当する。3期が石峡中層（4期墓）に相当し、東澳湾・竈崗に相当するという。このうち、珠江デルタとの関連で、山水銀州遺跡の調査が重要である。朱非素は、銀州遺跡から出土する釜形鼎に注目し、石峡文化との関連を指摘している（朱1994・1995）。

内陸部と珠江デルタとの関連において、石峡文化は重要な位置をしめる。これについては、稿を改めて述べたい。今回編年に使用した標準遺跡と、時期的な対応関係は以下の通りである。

表14 珠江デルタ新石器時代中期～晩期の編年

Ⅰ	大黃沙5・6層	↑?		後沙湾1期（6層）
Ⅱ	大黃沙4層	咸頭嶺	草堂湾1期（6層）	
Ⅲ	大黃沙2層			
Ⅳ			草堂湾2期	
Ⅴ				後沙湾2期

各期の様相

Ⅰ期は、大黃沙遺跡5・6層・後沙湾遺跡1期と深湾村遺跡が時期的に併行するが、深湾村遺跡と大黃沙・後沙湾遺跡とでは、土器群の様相が異なる。すなわち、大黃沙・後沙湾遺跡の器種構成は、釜・罐・鉢・盤で、彩陶盤が特徴的である。一方深湾村遺跡の器種構成は、器座がこの器種構成に加わる。また釜が、大黃沙・後沙湾遺跡のものは、口縁が肥厚し断面が三角形を呈するのに対して、深湾村遺跡では口縁部が肥厚せず外反し、先端部がやや尖っており器壁が薄い。また大黃沙遺跡・後沙湾遺跡では、釜にしかも口縁部および肩部に沈線文を施している。このように、同時期に比定される土器群も、その様相が遺跡によって異なる。後沙湾遺跡と大黃沙遺跡は、彩陶盤に文様が異なるものが出土するなど、相違が認められるが、器種構成・施文方法などに共通点があり、一型式として把握できる。

Ⅱ期は、大黃沙遺跡4層・咸頭嶺遺跡・草堂湾遺跡1期が相当する。Ⅰ期と同様に、咸頭嶺遺跡・草堂湾1期と大黃沙遺跡4層では、土器群の様相が異なる。大黃沙遺跡の器種構成が、釜・罐・彩陶盤であるのに対し、咸頭嶺・草堂湾遺跡では、彩陶盤は出土せず、そのかわり器座の出土している。また文様は、Ⅰ期の後沙湾・大黃沙遺跡、Ⅱ期の大黃沙遺跡出土の土器群は、土器は盤・罐に文様が施され、盤は彩色・沈線・鏤孔で施文するのを特徴とする。一方、咸頭嶺・草堂湾遺跡では、盤は施文の対象とはならず、釜に貝殻腹縁による波状文や圧痕による連続文様が

施文されるのを特徴とする。そして後者では釜の器壁は薄く、口縁部は肥厚せず先端部が尖っており、2種類の大きさのものが存在するなど、大きさによる器種の多様性が伺える。

またⅡ期の大黄沙遺跡4層の土器群をみると、釜または罐には有文のものと無文のものがあるが、このうち有文のものは、器壁が薄く口縁が外反し先端が尖っており咸頭嶺遺跡で顕著にみられる釜・罐の特徴をもつ。大黄沙遺跡4層の土器群は、このように、咸頭嶺・草堂湾遺跡の土器のうち、一部の土器群とよく類似している。一方、同時期の咸頭嶺・草堂湾遺跡の土器群は、この時期器種構成において主要な割合をしめるのは釜であるが、大黄沙遺跡4層や後沙湾遺跡1期の土器の要素は見いだせない。

彩陶盤が出土する遺跡としては、香港春坎湾・銅鼓州・黒沙湾・湧浪・大湾・蟹地湾・龍穴・蜆殼州・萬福庵遺跡があげられる。彩陶は編年の重要な属性の一つであり、彩陶を伴う時期はⅠ・Ⅱ期に限定され、しかもⅠ期とⅡ期とでは、形式的な変遷が認められる。鄧聰が指摘するように、彩陶の文様はバリエーションが豊富で、時期決定において有効な型式変遷がたどれると思われる。しかし、まず遺跡の中で、個々の型式の彩陶が、どのような土器群と共伴して出土するかを把握してはじめて、より詳細な編年が可能である。大黄沙・後沙湾・深湾遺跡以外の遺跡は、層位ごとの土器群の把握が不明確であり、これらの遺跡がⅠ・Ⅱ期のどちらに属するか判断できない。本稿では、これら彩陶を出土する遺跡はⅠ・Ⅱ期として扱いたい。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期に属する遺跡は、小梅沙・金蘭寺遺跡等で島嶼部の遺跡は、珠海市の東澳湾・後沙湾・黒沙・草堂湾、香港大嶼山島の東湾・深西湾・深湾・大湾・西湾・虎地湾・沙州・銅鼓があげられる。

遺跡の立地からみると、現在の珠江水系河岸の台地上に立地するものと、島嶼の砂丘上と大陸沿岸部の砂丘上に立地するものの3種に分けられる。そして、デルタ上部の遺跡では、蜆殼州・万福庵遺跡に見られるように、蜆等の汽水域の貝種を主体とする貝塚を形成する。たとえば蜆殼州遺跡は、西江が珠江デルタに流れ出る地点に位置する。現在遺跡の周囲は水田で、遺跡は約1.5mの微高地上に立地し、遺跡の面積は2000m²に及ぶ。新石器時代の貝層は、0.5mで、遺物包含層は貝層を含む4b層と含まない4a層に分類され、貝は淡水のものが80%、汽水産のものが20%をしめる。住居址は発見されていないが、20数基の墓が発見されており、ほとんどが堅穴土坑墓で側身屈葬・屈葬をとる。珠江口付近の砂丘上遺跡は、デルタ上部の貝塚遺跡と比較すると、遺跡の面積も、文化層も薄く貝塚を形成しない。咸頭嶺・草堂湾遺跡は、それぞれ大鵬湾の砂丘上及び、珠海口の三竈島の海岸砂丘上に立地し、デルタ上部にまではその分布が及んでいない。また、咸頭嶺遺跡は、砂丘遺跡としては、例外的に規模が大きく、住居址と思われる柱穴や、大量の土器と紅焼土が面的に広がる遺構も発見されており、珠江口および島嶼部の後沙湾・大黄沙遺跡などの彩陶を伴う遺跡群とは、遺跡規模およびその様相が異なる。

新石器時代中期から晩期にかけて、Ⅰ期からⅤ期に分期した場合、Ⅰ期からⅢ期の各時期に、明らかに様相の異なる2つのタイプの土器群が同時併存することが指摘できる。このことは、遺跡のあり方と分布からも明らかで、彩陶が共伴する土器群をもつ遺跡が、デルタの上部、現在の

珠江水系河岸の台地から、島嶼部・大陸沿岸部と広く分布するのにたいして、咸頭嶺・草堂湾遺跡に代表される遺跡は、島嶼および大陸沿岸部にその分布が限られている。しかし、いずれにしてもデルタ内部には遺跡が形成されないことが大きな特徴である。

東南中国において、新石器時代の土器を概観してみると、時期と地域を越えて認められる共通点が存在する。それは土器が釜を主体とし、三足器をともしないこと、成形方法は叩き技法を用い、縄文から刻目印板へと次第に変化し、いわゆる印文硬陶が出土する点である。

しかし、Ⅰ～Ⅱ期にかけては、異なった2つのタイプの土器群をもつ遺跡が同時併存しており、かつⅣ期以降に、Ⅲ期までの土器群の要素が、必ずしも継承されているとは考えにくい。このことは、Ⅳ期からⅤ期にかけての時期についても同様である。このようにⅢ期までの時期とⅣ・Ⅴ期とはその様相が異なっており、その理由については今後検討が必要であろう。

Ⅳ・Ⅴ期では、さらにこの時期遺跡数が減少することが特徴として認められる。Ⅳ期で、草堂湾2期に比定される遺跡は、湧浪・銀州遺跡であるという意見もある（朱1994・1995）。しかし、湧浪・銀州遺跡は、まだ正式な報告書が発表されておらず、実体が不明確である。Ⅴ期に比定される遺跡は、金蘭寺・茅崗等の遺跡がデルタの上部に位置し、佛山河宕・南海県竈崗・魚崗・多石崗遺跡等も同時期とされる。竈崗・茅崗遺跡では住居址が発見されている。竈崗遺跡は、丘陵上に遺跡が形成され平地住居と考えられる焼土と柱穴が見つかり、一方、茅崗遺跡からは、低湿地上にたてられた高床式住居の痕跡と思われる木柱がそのまま発見されており、住居の下に貝塚が形成されている。

Ⅳ期からⅤ期の遺跡形成およびその基本的な分布のあり方は、Ⅰ～Ⅲ期の様相を踏襲している。即ち珠江水系の河岸段丘上と、大陸沿岸部の砂丘上、島嶼部に遺跡は立地し、デルタ内部には形成されない。またⅢ期までと比較すると、Ⅳ期には遺跡数が減少しており、再びこの地域で遺跡数が増加するのは、Ⅴ期以降の商・周併行期以降のことである。

Ⅳ 討論

編年

広域編年をおこなうため、まず広東省珠江デルタ地域と福建省閩江デルタ地域の新石器時代中期から晩期を、それぞれ5期と3期に分期した。以下、その時期と代表的な遺跡を示す。

広東省珠江デルタ地域

- Ⅰ期 大黃沙遺跡5・6層・後沙湾遺跡1期
- Ⅱ期 大黃沙遺跡4層・咸頭嶺遺跡・草堂湾遺跡1期
- Ⅲ期 大黃沙遺跡2層
- Ⅳ期 草堂湾遺跡2期
- Ⅴ期 後沙湾遺跡2期

福建省閩江デルタ地域

I 期 穀坵頭遺跡・溪頭遺跡下層・平漂南厝場遺跡

II 期 曇石山遺跡下層 (第6・7次)

III 期前葉 溪頭遺跡遺跡早期墓・曇石山下層墓

中葉 曇石山遺跡中層墓 (中層墓 A) ・ 溪頭遺跡晩期 M32 (晩期墓 A)

後葉 曇石山遺跡 8 次調査分 (中層墓 B) ・ 溪頭遺跡晩期墓 (B)

福建・広東省沿岸地域の広域編年をおこなうためには、閩江デルタと珠江デルタの中間地域、すなわち広東省東部地域と、福建省南部地域の編年が必要である。しかし、各地域の土器分析でのべたように、この両地域における新石器時代中期から晩期にかけての発掘調査例は、きわめて少ない。また広東省東部で、発掘調査によって時期が確定されている浮浜類型は、時期的に下る商・周併行期と考えられ、この時期の東南部で特徴的な、凹底罐や鳥形壺が出土している(朱1986)。

福建省南部においても、商・周併行期と考えられる、いわゆる印文硬陶と彩陶が出土する遺跡は発見されているが、新石器時代中期から晩期の遺物の様相は明確ではない。このように現時点では、閩江と珠江との中間地域の土器群の様相は明確でなく、土器による沿岸部全域の広域編年をおこなうのは、まだ困難な状況である。よってこの両地域を比較する場合、現時点では、新石器時代中期の BC. 5000～3000年と、新石器時代晩期の BC. 3000～2000年というおおまかな実年代を設定して、両地域を比較したい。珠江デルタのⅠ～Ⅲ期と閩江デルタのⅠ期が新石器時代中期に、Ⅳ・Ⅴ期とⅡ・Ⅲ期が新石器時代晩期に相当する。

遺跡の分布と動向

珠江デルタをまず概観すると、Ⅰ～Ⅲ期に遺跡が集中する傾向が認められ、Ⅳ・Ⅴ期になると、その遺跡数は減少する。筆者が以前指摘したように、珠江デルタで再び遺跡が増加に転じるのは、新石器時代終わりで、土器は、いわゆる印紋硬陶が増加し、凹罐や鳥形壺が出現する。実年代ではおそらく BC. 2000年以降であろう(西谷1994)。

内陸部の BC. 4000～2000年では、・前石峡文化(朱非素は草堂湾1期に併行するとする)→石峡文化(BC. 3000年紀中ごろ)→石峡中層(BC. 前2000)という変遷があり、石峡中層の時期に至ると、かつて石峡文化に見られた良渚文化と共通した特徴の多くが失われ、かわって早期の印紋陶が出現する(朱1984)。これらの状況を西江清高は、「年代の対応からみれば、広東沿海部の大湾文化の退潮は・広東内陸部を中心とした良渚・焚城堆に連なる石峡文化の登場と相前後するようにみえる」と指摘し、さらに「石峡文化も、長江下流域における良渚文化や焚城堆文化の消失に連動するように変容し、前2000年紀には、広東の沿海部と内陸部に共通して早期の印紋陶や器形としての凹底鍵などが登場した。すなわち先述した印紋陶を指標とする中国東南部の広域にまたがる文化的まとまりが形成されたのであった」と主張する。そして、「少なくとも前4000年紀までは珠江三角洲を中心に展開し、原オーストロネシア語族との接点も指摘できる大湾文化は、中国東南部の中央部に、良渚・焚城堆・石峡の広域の連鎖が出現した時期を挟んで、やがて(お

そらくオーストロネシア語ではない非漢語を話した人々に担われた) 印紋陶の文化的領域が広く形成されてくる大きな文化史的流れの中で、東南沿海部から消えていったのだということが出来る」とする。區家発も主張するように、BC. 4000年ごろ展開する砂丘遺跡群(大湾文化)のあと、無遺物層を挟んで、BC. 2000年前後の早期印紋陶を含む時期の文化層が堆積することを指摘している。(區1993)

珠江デルタ地域で、今回おこなった編年と土器の分析から 珠江デルタのⅠ期～Ⅲ期のうち、Ⅰ期・Ⅱ期は、土器群の様相から、Ⅰ期においては、深湾村と大黄沙・後沙湾タイプ、Ⅱ期では咸頭嶺・草堂湾タイプと、大黄沙タイプに分類でき、その遺跡の分布状況と遺跡のあり方が異なる。すなわち後沙湾・大黄沙タイプは、珠江三角洲デルタ上部にみられる遺跡群で、現在珠江水系河岸の台地上と、島嶼の砂丘上と大陸沿岸部の砂丘上に立地する。そして、デルタ上部の遺跡では、蜆殼州・万福庵遺跡に見られるように、蜆等の汽水域の貝種を主体とする貝塚を形成する。珠江口付近の砂丘上遺跡は、デルタ上部の貝塚遺跡と比較すると、遺跡の面積が小さく、文化層も薄く貝塚を形成しない。咸頭嶺・草堂湾タイプは、大鵬湾及び、珠海地域など、デルタ上部には遺跡は形成されず、珠江口周辺及び、島嶼部にその分布が限定される。また、咸頭嶺遺跡は、砂丘遺跡としては、規模が大きく、住居址と思われる柱穴や、大量の土器と紅焼土が面的に広がる遺構も発見されており、後沙湾・大黄沙タイプの遺跡形成とは異なる。またⅠ期の土器群の様相には、鄧聰や區家発が指摘するように、長江中流の大溪文化の要素が認められる。しかし、遺跡の立地、そして推定される生業は、明らかに当時の珠江デルタの生態環境に適応した形態である。

さらにⅢ期では、大黄沙遺跡2層において、Ⅰ期の彩陶を特徴とする土器群の様相を残しつつも、珠江デルタの河口域、および大陸の砂丘上に生活の基盤をもつと考えられる咸頭嶺・草堂湾タイプの土器群の様相が濃密に見られるようになる。

一方、福建沿岸部においても、閩江デルタのⅠ～Ⅲ期に相当する福建沿岸部Ⅰ期の遺跡は、閩江河口・九龍江河口の島嶼の砂丘上や、沿岸部の台地上に立地し、しかもハマグリ・カキ等、海産の貝を主体とする貝塚を形成する。福建沿岸部で、デルタの上部の閩江・九竜江の河岸段丘上や、さらに上流域に河川沿いに遺跡が形成されるのは、Ⅲ期以降のいわゆる曇石山文化期以降である。また、福建沿岸において、Ⅰ期の土器群の様相からは、内陸部との何からの関連が認められる要素は認められない。むしろ、殼丘頭遺跡で出土した、玦状耳飾や、口縁が六角形を呈する土器などの遺物が注目される。このように、福建省から広東省における沿岸部の中期の動向は、地域によって異なり、河川を通じての内陸部の影響という概念だけでは把握できない。

新石器時代中期は、珠江デルタにおける大黄沙・後沙湾タイプのように、大溪文化との濃密な関連を想定できる遺跡群も存在するが、これらの遺跡を形成した集団は、福建から広東沿岸部、さらに台湾の大全坑文化にみとえられるように、当時の沿岸部の生態環境に適応した集団と考えられ、一つの地域設定が可能であろう。地域設定は、最初に地理的な区分があるのではなく、む

しろそれらを越えた集団の動向を把握した上で、地域性を想定すべきであろう。

従来、珠江デルタⅠ～Ⅲ期の遺跡群は、デルタ地域に適応した新石器時代中期の文化として理解されてきた。朱非素は、これらの遺跡の立地から、水上の交通を利し、海洋生物をおって季節的に移動をおこなった集団を想定し、彼らの生業を狩猟採集と考え、海洋と沿岸の生態環境に適応した文化であったと考えた(朱1991)。また、嚴文明は、砂丘上に短期間居住した遺跡のあり方と、貝塚遺跡とを比較して、前者が季節の集落である可能性を指摘し、また砂丘遺跡は台風には堪えられないとして、台風の季節後である冬と春の居住を考えた(嚴1991)。季節性を問題にした点非常に重要な指摘であろう。今後、遺跡の季節性を問題とした発掘が待たれる⁽²⁾。また、現在までの発掘では、砂丘遺跡からはまったく動物遺存体が出土していない。当時の砂丘形成に要因があるのかどうか、原因は不明であるが、このことがこの地域の生業の復元を困難にしている。

いずれにしても、内陸河川からデルタ地域に居住する集団と、大陸沿岸部と島嶼に居住する集団との棲み分けがあり、このことがその二系統の土器群に反映されたのではないか。また両者の接触が、その後の内陸から河川を媒介としたデルタ地域との交流、さらに沿岸から海外への生活活動の広域化というネットワークを構築していくきっかけになっていったと考えられる。

地形変化と遺跡

珠江三角州は歴史的にみると、毎年大量の土砂が流れ込むことによる、海岸線の変化に加え、気候変動による海進海退の影響で、海岸線の位置や、三角州の水文環境は時代によって相当変化してきた。李平日等は、珠江三角州の一万年にわたる環境変化を取りあげ、気候および海岸線の変化を綿密に復元している(李1991)。各時期の海岸線を決定するにあたり、以下の堆積層を重要な判断材料としている(図17)。

【海面下2m】海岸線付近に堆積する汚泥。(汽水産の珪藻化石、有孔虫、汽水産の甲殻類、マングローブ・ハマビシの花粉、腐木。

【海面と同じ】瀉湖の汚泥、海難石、海難砂、船台の枕木。

【海拔2m】砂丘の堆積(砂丘中にみられる貝殻・腐木)

さらに、採集地域の地殻の隆起・沈降速度を考慮に入れ、採取資料の堆積時点における海水面を求めている。新石器時代中期6000年前の珠江三角州の海岸線は、九江・佛山・広州・白沙・黄埔を結ぶあたりと推定している。海水面の上昇は気候の温暖化に起因するとし、各時期の珠江三角州の海水面変化をまとめている。

1. 7000 B. P. から6000 B. P. にかけて海水面は上昇し、6000 B. P. で現在より1m 高くなる。
2. 6000 B. P. から海水面は下降し、5500 B. P. で、現在より3.5m 低くなる。
3. 5500～2800 B. P. にかけて海水面は上昇するが、5500 B. P. ～5000 B. P., 5000～4500 B. P., 4500 B. P. ～3200 B. P., 3200 B. P. ～2800 B. P. の4時期に分かれ、特に3200 B. P. から2800B. P. にかけて海水面は現在より1m 高いところまで急上昇する。

4. 2800 B. P.～2200 B. P.にかけて海水面は下降し、現在より2 m 低くなる

5. 2200 B. P.～900 B. P. は海水面が上昇するが、とくに2000 B. P.～1800 B. P. と1500 B. P.～1100 B. P. では現在より0.5～1 m 高い。

気候が現在よりも温暖な海進期は、熱帯の様相を示すことが花粉分析によっても指摘されている。李平日は海岸線の復元の根拠に、花粉分析によるマングローブ林の存在を挙げている⁽³⁾。

遺跡の内容と立地との間には、各時代に共通した特徴が認められる。新石器時代中期と新石器時代後期から青銅器時代前期にかけての遺跡は、デルタ上部のおそらく川の氾濫源と思われる地点、すなわち西江と北江が合流する地域と東江上流部に、貝塚・住居址・墓地を伴う遺跡として形成される。そして、新石器時代後期から青銅器前期にかけて、海岸線が海に延びるにしたがい、住居址をともない貝塚を形成する遺跡も徐々に西江沿いに南下する。しかし、当時デルタの先端部であったとおもわれる地点に、遺跡は形成されていない。一方、香港の島嶼部の砂丘上・そして珠海や大鵬湾沿岸部の砂丘上には、比較的短期間居住したと推定される遺跡が残される。しかも、このような居住形態をとる遺跡は、先ほども述べたように、気候が温暖化し、海水面が上昇する時期に集中する。

海進期の影響は、福建沿岸地域でも認められる。BC. 4000年前後以降、もっとも海進が進んだ時期には、海岸線は内陸部に入り込み、閩江・晋江・竜江など、現在みとめられる河川下流のデルタはまだほとんど発達していない。

福建・広東省において、農耕の証拠となる、たとえば稲などの植物遺存体は発見されていない。しかし、珠江西江流域で西江がデルタに流れ込む最上部に位置する蜆殻遺跡からは、石包丁が出土している。一般にデルタ上部は下部に較べて淡水が容易に得られ、植物の栽培もしやすい。東南アジアの諸河川流域のデルタ地帯でももっとも早く農耕が行われ集落が形成されるのはこの地点である。また北江と西江がまじわる地点に位置する銀水遺跡からは、広東省北部の石峡文化の鼎が出土しており、石峡文化との関係が注目されている。石峡文化は、良渚文化の影響を強く受けた文化で、稲作農耕がすでにおこなわれていたとされる。これらのことを考えあわせると、なんらかの農耕を行っていた可能性が高いのは、蜆殻・銀州遺跡、茅崗・金蘭寺遺跡などで、遺跡形成当時、デルタの上部に位置した遺跡である。ただ主な生業は、朱が指摘しているように⁽⁶⁾、貝塚の存在と動物遺存体から狩猟・採集が中心であったと思われる。また長江下流域では、新石器時代の貝塚は形成されていないが、珠江デルタではデルタの上部にも貝塚が形成される。これは、蜆殻遺跡で出土した貝種が淡水・汽水種の両種があり、その比率が示すように、海進期に汽水域が相当上流部まで入り込んでいたことを示唆している。

一方、海岸部の遺跡にも、大黃沙遺跡のように砂丘上に遺跡を形成し、背後にかなり大きな後背湿地をもつ遺跡も存在する。しかし、海水面が上昇していたこと、また珠江河口の干満の差が大きく最大で3.6mに達すること、そしてこれらの後背湿地の海拔標高がせいぜい2～5 m であること考えると、遺跡形成当時には塩水が侵入していたと考えられ農耕に適していない。砂丘上

に形成された遺跡では、動植物遺存体の出土が非常に少なく、貝塚を形成する遺跡と島嶼・海岸部での具体的な生業の差異や、有機的な関係を復元する妨げとなっている。ただ、当時の生業が狩猟・採集が主であったことは確実である。逆説的ではあるが、気候と水位によって珠江デルタの利用状況が左右され、気候が温暖で海水面があがる海進期に遺跡が集中する傾向がみとめられるのは、それだけ安定した農耕がまだ定着していないことを暗示している。特に気温の上下と水位は食物採集に大きな影響を与えたと思われる。

このように、先秦時代の珠江デルタの居住条件は、全時代を通じて決して安定したものではなく、むしろ気候変動に左右されやすかった可能性が高い。こうした条件下、比較的長期間人々が居住したと思われる貝塚遺跡は、デルタ先端部をさけ、微高地に居住し高床式住居を採用しているし、島嶼部や海岸部では砂丘地帯を選んで遺跡が形成されている。このような現象は、季節ごとのデルタの生態環境の変化、マングローブの広がりによる居住地域の限定、熱帯気候と低湿地にともなう病虫害を避ける必要など、様々な理由が考えられ、新石器時代を通じて、デルタの居住条件はかなり限定された環境であったと推定される。

江南デルタと東南沿岸部

東アジアの稲作農耕起源と稲作農耕文化の研究で、長江流域から南の華南地域は、重要な地域であろう。昨今、考古学・農学・地質学等の各研究分野から活発に研究が行われ、特に長江の中・下流域が稲作の起源地の一つとなる可能性の高い点が指摘されている⁽⁷⁾。しかし、中国大陸における野生稻の分布は、長江中・下流域ではなく、広東・広西・海南島地域にもみられる。気候的にも、新石器時代において、中国南部は長江流域より湿潤・高温な地域だと推定され、広東・広西・海南島地域がより農耕に適していたかのようにも考えられる。ところが現在までの考古学的な調査によればこの地域の稲作農耕は長江流域に比較して遅く、新石器時代晩期の広東省石峡遺跡での炭化米の出土が最も遡るものとされている。

稲作の起源地をどこに求めるかについては、長江流域以外の地域の可能性が、完全に否定されたとはいえられないが、稲作を基盤とした農耕社会の成立と、周辺地域に与えた影響という視点に立てば、長江中・下流域がその中心的役割を担ってきたことは確実である。ではなぜ、長江中流域から下流域において、稲作の開始が周辺地域と比較して早かったのか、そして新石器時代前期から現在に至るまで稲作を基盤とした農耕社会を維持することができたのだろうか。

長江下流域の右岸の江南デルタは⁽⁸⁾、東西約200km、南北約150kmの広がりをもつ広大な低地である。その範囲は、西はおよそ鎮江から、北は蘇北灌溉総渠まで、南は杭州湾北岸までをさす。この低地には、太湖、淀山湖などをはじめとする多数の湖沼が分布し、太湖の東側や南側の地域は海拔標高1～2mと周囲と比較してさらに低い。江南デルタの現在の地形は、全体的にみれば、太湖周辺を中心とした、盆地状の地形をなしている。この江南デルタは、第4紀末期における海面変化や、沖積作用によって形成されたと考えられ、その発達や湖沼の形成については古くから議論されてきた。

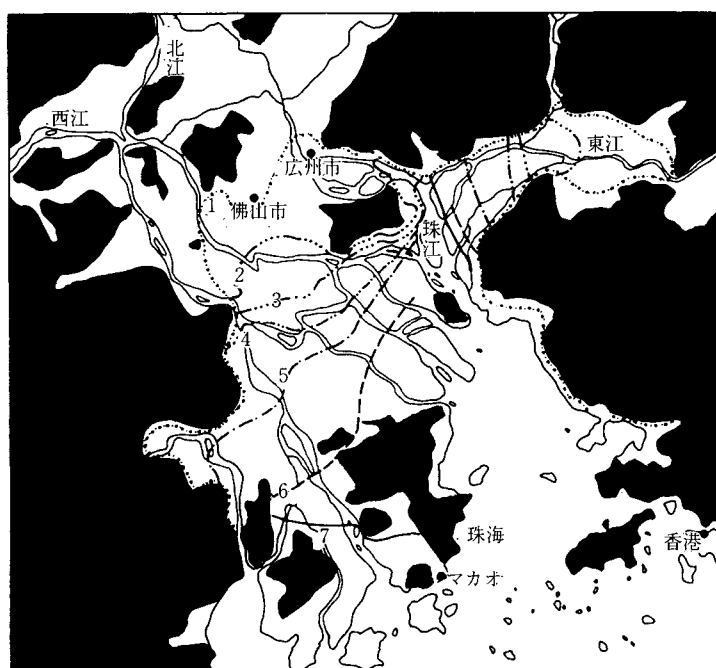


図17 珠江デルタにおける海岸線の変化
(李平日他, 1991)

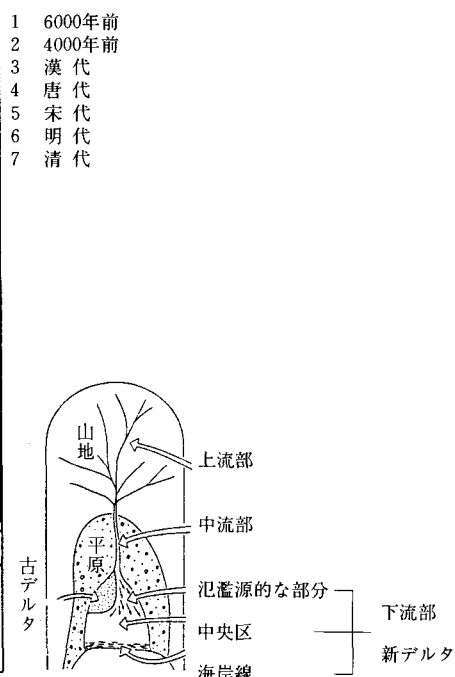
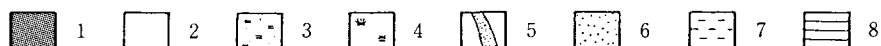
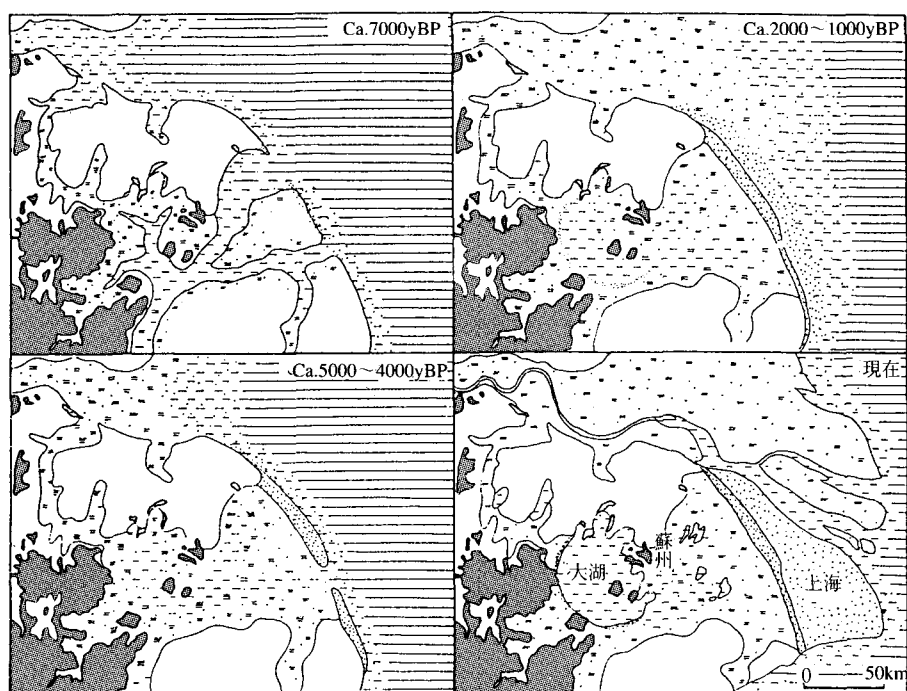


図18 デルタの基本モデル
(高谷好一, 1985)



1. 山地・丘陵 2. 台地 3. 氾濫原・三角州 4. 泥炭地 5. 砂州・砂嘴
6. 砂堤列平野 7. 浅い水域 8. 水域

図19 江南デルタの古地理の変遷

江南デルタの生成については、陳吉余他が、太湖一帯の潟湖の陸化にともなう江南デルタが生成したという見解を発表して以来、この考えが広く受け入れられてきた (陳1959)⁽⁹⁾

江南デルタの形成についての研究史については、海津が的確にまとめている (海津1994)。それによると陳吉余他の主張は要点は以下の通りである (図19)。後氷期海進に伴う海湾の形成の後、現在の長江南岸および杭州湾北岸にはほぼ沿う大規模な砂州の形成によって太湖一帯が潟湖化した。低地の微地形の検討から、長江右岸の鎮江付近から上海市西部、さらに杭州湾北岸にかけて海拔標高5～8mに達する砂質微高地が、完新世の高海面期における砂州であるとした。そうして、いくつかの地点における試錐試料から海湾時代の堆積物と潟湖および河成堆積物を認め、また、太湖の東に位置する震沢鎮付近において、地表下約5mに海湾時代のカキ礁が存在していることから、本地域が、海湾～潟湖～沼沢地 (海洋から完全に隔離された湖沼の分布する地域) へと変化したことを明らかにした。また、歴史資料の検討と、長江三角州の表層堆積物の分析から、約2000年前の海岸線が蘇州市の東に位置する大倉と杭州湾岸の漕径を結ぶ線に沿って走っており、さらにその延長部は、杭州湾に入った後、王益山に至り、さらに西に折れて徹浦に達することを明らかにした。また、当時の海岸線に沿って貝殻堤が断続的に存在することを示している。

このように、江南デルタの新石器時代の地形特性と変化を、海津は、3つに地域に分類して考えている。即ち江南デルタの低地を構成する地形面、①低地の北西部、太湖の北岸にあたる常州・無錫付近と南部の太湖と杭州湾とにはさまれた地域に広く分布する洪積台地、②太湖周辺およびその東側にひろがる湖沼地帯、そして、③長江の河岸にかけてひろがる沖積低地の3つであるとしている。さらに洪積台地の表層に黄土層が堆積しており、その形成が更新世最末期の最終氷期最盛期頃にあたると考えられていることから、洪積台地の形成はそれ以前にさかのぼると考えられる。洪積台地は、長江に沿う地域や江南デルタ中央部から東部にかけての地域では、最終氷湖の最大海面低下期に各河川が下刻して形成された埋没谷によって刻まれている。その後の海面上昇に伴って、これらの河谷は次第に新しい堆積物 (沖積層) によって埋積されるが、太湖地域および湖沼地域の大部分は洪積台地面がわずかに低くなった凹地的な地域であったと考えられ、この部分に水域が広がるのは後氷期海進にともなう海面高度がほぼ現海面に近づいた約6,000年前頃であろうと推定される。

また、このころに台地の東端部を結ぶように砂州 (崗身) が形成され始めたと考えられる。この水域の拡大にともなう、カキなどが生息するが、同時に沼沢地化にともなう泥炭地の形成も進み、水域と泥炭地とがモザイク状に分布する、現在の湖沼地帯に近い景観が出現したと考えられる。その後、長江による土砂の堆積にともなう崗身地帯の海側に砂質堆積物が付加的に堆積し、現在の上海市域の大部分をのせる沖積地 (砂堤列平野) が形成された。つまり、約6000年前、大地東部に砂州が形成されると共に、その内部の現在太湖を中心とした周囲は、沼沢地が進んだことになる。この地域の時代文化区分に照らし合わせれば、稲作農耕を基盤とした馬家浜期、および崧澤期から良渚文化期は、淡水化した太湖周辺地域への進出としてとらえられることができる。

厳文明は、稲作農業がなぜ長江流域において始まったのか述べている（厳1995）。非常に重要な視点であり、引用が長くなるが要点を述べておきたい。稲の野生種が最も集中しているのは海南島と広東省、および広西壮族自治区であることを指摘しつつも、一部の野生稲は嶺南山脈を越えたとする。また石峡文化の農業は江西省あたりから伝播してきた可能性が強いとし、稲作文化は広東省北部の限られた区域のみ分布していて、華南のその他の大部分の地域では、農業の痕跡は見出しえないとする。商周時代に至っても、華南は採集経済が中心であった。その原因は、天然の食物資源が豊富にあり、かつ通年にわたって採集できたこと、野生稲は、各種の食物のうちでも最も採集と加工が困難なものであって、その味もまた、当時の人々にとっては最も好ましいものとは見られていなかったと推定する。日常的に採集できる量も多くはなく、野生稲を栽培し繁殖する必要は全くなかったとしている。また地形的にみても、華南は山脈や丘陵が多く、地形は分断されていて、大平原や大三角州（現在の珠江の三角洲の陸地部分は、ここ数千年の堆積である）が少なかったことから、史前文化は長期に発展しなかった。このため、人口は多くなく、長期にわたって人口増加の圧力もなかったので、農業が発展する社会状況になかったと考えた。長江流域は、四季がはっきりとしており、夏秋は植物の生長が旺盛で、食物資源は十分に豊かではあったが、冬季は寒冷かつ乾燥していて、自然界の植物性食物を得ることは難しく、狩猟による動物の確保も保証されたものではなかったため、人類は冬季の食料確保についての手段を必要とした。長江中・下流域には、比較的広範囲な沖積平原があって、史前文化の発展が容易であり、その発展に伴って、人口もまた急速に増加し、自然物を冬季に必要とするという矛盾もより大きなものとなってきた。野生稲の量も多くはなく、人々は食料の採集源を拡大して採集に努めた。その中で、粃が貯蔵に優れていることを発見し、意識して保護・肥培と繁殖に努めた。稲作農業はこのようにして出現したとする。

厳文明が述べる稲作が長江流域のどの地域ではじまったかという問題は、今後考古学的にどこまで検討できるかが課題になろう。ここで指摘しておきたいことは、長江下流域、特に太湖周辺の稲作農耕の発達は、非常に特異な地形を呈することに起因すると推定されることである。すなわち、長江下流域デルタ地域の、太湖周辺地域は、洪積台地に囲まれた低い盆地状の地形を呈する。このような地形上の特徴は、中国大陸の河川、東南アジアの諸河川下流等のデルタ地域には認められない。前4000年以降、長江下流デルタの地域で、太湖が出来、その周辺地域が淡水化したとことが農耕の発達の基礎となった条件と考えられる。

一方、これまで述べてきたように、福建・広東省沿岸部に形成される遺跡は、河川下流域のデルタ内には進出せず、デルタ上部の河川河岸と、島嶼・大陸の砂丘地帯に分布する。さらに重要なことは、福建省では、新石器時代後期以降、広東では新石器時代中期から、他地域ですでに稲作農耕がかなり進んだ地域との密接な関連が指摘できるのにも関わらず、新石器時代を通じて、この地域の遺跡の立地と生業は、終始変化することなく独自性を保つ。このように、中国東南部沿岸の新石器時代中期から晩期にかけての時期は、地理的な要因と遺跡の形成が密接に関係して

おり、それが歴史的動向にも色濃く反映していたものと考えられる。

(1996. 3. 31)

本稿の作成に際し、文本亭（深圳博物館）、楊耀林（深圳博物館副館長）、商志 韞（中山大学）、鄧聰（香港中文大学）、陳星灿（中国社会科学院考古研究所）、黄建秋、後藤雅彦の先生諸氏よりご援助を賜りました。記して感謝致します。

註

- (1) 考古遺物から地域性を主張し、「区系類型」論を展開したのが蘇秉琦である（蘇1981）。佟柱臣は、中国の先史時代を地理的に区分した（佟1985）。大陸を北から順番に東西に連なる陰山脈・秦嶺山脈・南嶺山脈で、中国大陸の地域区分をおこなっている。それぞれの陰山三百以北地区・陰山～秦嶺間・秦嶺～南嶺間・南嶺以南の4つの地域区分を提唱した。そして、それぞれの山脈を堺として、北と南では文化が異なり、山脈地帯が接触地帯であると主張する。さらにそれぞれの地域に独特の地域文化が育まれたのは、自然環境の相違に要因を求めている。
- 殷文明は、黄河地域を中心とする「華北系統」、長江中・下流域を中心とする「東南系統」、遼河流域を中心とした「東北系統」という3系統の文化を設定し、「東南系統」稲作を中心とした鼎を使用する地域とする。そして、3系統の文化に相互関係の中に中国文明の形成をとらえることが出来ると主張する（殷1987・1994）。西江は、釜の分布が、土器製作における叩きの分布と重なることから、殷文明の三系統に、釜文化系統を加えて、4類型に区分する（西江1995）。
- (2) 今回扱う地域での、新石器時代遺跡の立地と、河川下流域に形成されるデルタとは、非常に密接な関係が考えられる。ではデルタは、どのような水文構造をもつのだろうか。高谷は、タイのチャオプラヤー川を参考に熱帯地域の巨大河川の基本的な性格をモデル化している（高谷1985, 図18）。巨大河川を木にたとえ、支流の発達する場所を上流、一本の主流になる部分を中流、分流を派生して再び広がる部分に分けると、デルタは下流にあたる。デルタ自体もさらに3つに細分している。第一はデルタの最上部で、これは中流に近い。第2が海岸部に沿う帯状の部分である。第3はその中間にあたる部分である。雨季になるとこのデルタの最上部は、氾濫源の性格がもっとも強くなり、氾濫源の出口から離れていくに従い、洪水はおさまり広い面積に拡散される。さらに海岸に近づくと、潮汐の影響で川や水路の水が半日単位で上下運動を繰り返すことになる。タイのチャオプラヤー川のモデルを、珠江三角洲と直接には比較できないが、このようにデルタを分類した場合、デルタの最上部には平原上に自然堤防の微高地ができ、人々はここに居住し後背湿地を組み合わせて安定した生活を送っている。一方、デルタの中央部は、雨季になると水没し、乾期になると干上がるという居住者にとっては甚だ都合が悪い土地である。チャオプラヤー川の場合、19世紀後半に人口的な盛土が作られる一方で、灌漑をおこなってはじめて大々的な稲作が行われるようになった。海岸地帯はマングローブの林でおおわれており、集落は干潮クリークにそって作られる。満潮になると潮の下に沈むため道路は全くなく水路が交通路である。
- (3) 報告書によると、罐の文様は、貝割文（貝殻腹縁による沈線文）によって施文されたとしている。馮永驪・文本亭は、貝で復元実験をおこなっている（馮・文1994）。
- (4) 北京大学と広東省文物考古研究所・三水県博物館が、銀州遺跡の発掘調査をおこなっているが、柱状サンプルによる、動物遺存体の調査がおこなわれており、今後生業にかかわる分析、調査が進展するものとおもわれる（銀州遺址聯合調査隊1995）。
- (5) マングローブは塩水が常時はいる地帯に成育し、約60種の樹種があり微妙な生態系に対応して特定の樹種が成育する。マングローブが成育するための最低条件は、雨量ではなく温度で、分布の北限は1月の気温が16度の地域である。陸側の条件としては、大河川の流出するきわめて平坦な地形で、長時間かけて運ばれてきた堆積物がさらに傾斜を緩くなって大量の堆積物が海を浅くし、海からの波風があたらないという条件が重なればマングローブの生育に最適である。また潮の干満の差が大きいほど緩やかな河川の上流域までマングローブが分布する。たとえば、パプアニューギニアのフライ川では河口から300キロ上流まで、南スマトラでは約100キロ上流のパレンバンまでマングローブが成育している。また、珠江デルタの土壌は強酸性の含塩水稲土である。これはマングローブ土の基礎の上に発達したものであるといわれている。マングローブの林には、塩水が進入するため水稲耕作は不可能で、しかも蚊が大量に発生するため現在でもマラリヤにかかる人が多く居住に適さない場所が多い。ただマングローブ林をはずれた泥質の汀線の干潟地は、マラリヤも少なくエビ・貝などの食料が豊富である。

先秦時代の遺跡を珠江デルタという特殊な環境にあてはめて、考えようとする場合、以上述べてきたように、気候変化と海進海退の問題、そして珠江の地理的な位置づけとデルタの特殊な水文構造を加味する必要がある註。

- (6) 朱非素 一九九四 「珠江三角洲貝丘、沙丘遺址和落形態」『南中国及隣近地区古文化研究』 香港中文大学中国考古芸術研究中心編、中文大学出版社
- (7) 稲作の起源問題と拡散については、長江流域を中心として、述べられてきた。

考古学の側からは、敝文明は、1982年すでに長江下流域が稲作の起源であり、その内容状況を以下のよう

に要約している（敝1982）。

- 1) 河姆渡遺跡第4層は、出土した稲穀が多く、専用の稲作農具もあることから、当時の稲作農業は萌芽期の時代を脱出していた。
- 2) 遺跡の大半は、古代の湖泊の沿岸や沼沢地帯にあり、花粉分析から周辺に水生植物が自生していたことが判り、当時は陸稲（山地稲）ではなく水稲であった。
- 3) 屈家嶺文化遺跡出土の稲穀はいずれも粳稲に属し、秈稲から粳稲に変わった。
- 4) 中国の栽培稲は1つの中心に発し、さざなみのように周辺に向かって波及した。杭州湾及びその周辺の自然は、稲の起源する条件を備えていた。
- 5) 稲作波及の第1波は、B. C. 4300-3700年の馬家浜文化時期で、長江デルタ海岸地帯に達した。第2波は、B. C. 3800-2900年の陽陰期と大溪文化の分布範囲で、長江に沿って西方に発展し、両湖盆地（湖北・湖南省の湖広盆地）に達した。第3波は、B. C. 2900-2100の長江下流域及び杭州湾地方の良渚文化、両湖盆地の屈家嶺文化（B. C. 2900・2600年）、朱江流域の石峽文化、さらには黄淮平原・江漢平原・長江以南に分布する龍山時代に属する良渚文化の範囲になる。第4波は、歴史時代の夏・殷・周時代で、長江上流域、台湾及び黄河中・下流域以北に拡大した。

一方農学・および民族学からは、雲南・アッサム起源説・長上上流域起源説であり続けた（中川原1976・1985、渡部1977）。しかし、最近、農学者からも長江下流域稲作起源を農学的な立場から賛同する説が始められた。和佐野喜久夫は、1）栽培稲の祖先野生種が自生していた、2）稲作の存在を示す最古の考古学的証拠（原始的古代稲の特性を所有する稲粒遺物と稲作農耕・米食関連遺物）がある、3）稲作農耕を必要とするに至った古代集落の社会的条件が考えられる、これらの3条件を満足する場所を特定しようとする。そして、稲作は、東アジアの稲作は、羅家角・河姆渡両遺跡を中心とした長江下流域・江南地方に始まり、古代稲作文化の波及及び民族の移動によって、中国全土及び周辺国へ伝播した。その伝播の主要経路（ルート）は、長江の下流域から中流域へと大河を遡行したものであったが、中流域からは、さらに元江・漢江などの長江支流を上流に向かって伝わり、雲南省山岳地帯は稲作伝播の最終到達点の一つであった。以上のことから、アッサム・雲南の亜熱帯山岳地帯にみられる栽培稲の遺伝的多様性は、その周辺域・国からの民族の移入・移動に伴って生じた地方品種の集積の結果であり、異なる国・地方の在来品種の吹きだまり過ぎない」という稲作の一元論を展開する（和佐野1995）。

また、佐藤洋一郎は、稲の種類としての秈稲と粳稲の区別は、籾の形によって区別下すものであり、DNAからの分類基準では、全く意味がないと主張する。

- (8) 長江下流域をはさんで北側の地域は、蘇北平原と呼ぶ。
- (9) 江南デルタの形成についての研究史については、海津が的確にまとめている（海津1994）。それによると鎮江余他の主張は要点は以下の通りである。後水期海進に伴う海湾の形成の後、現在の長江南岸および杭州湾北岸にはほぼ沿う大規模な砂州の形成によって太湖一帯が潟湖化した。さらに低地の微地形の検討から、長江右岸の鎮江附近から上海市西部、さらに杭州湾北岸にかけて海拔5～8mに達する砂質微高地の存在が、これが完新世の高海面期における砂州であるとしたら、さらに、いくつかの地点における試錐試料から海湾時代の堆積物と潟湖および河成堆積物を認め、また、太湖の東に位置する震沢鎮付近において、地表下約5mに海湾時代のカキ礁が存在していることから、本地域が、海湾「潟湖～沼沢地（海洋から完全に隔離された湖沼の分布する地域）へと変化したことを明らかにした。また、歴史資料の検討と、長江三角洲の表層堆積物の分析から、約2000年前の海岸線が蘇州市の東に位置する大倉と杭州湾岸の漕径を結ぶ線に沿って走っており、さらにその延長部は、杭州湾に入った後、王益山に至り、さらに西に折れて徹浦に達することを明らかにした。また、当時の海岸線に沿って貝殻堤が断続的に存在することを示した。

文献

- 安徽省博物館 1980「安徽貴池發現東周青銅器」『文物』1980—8
- 安徽省文物考古研究所 1986「望江汪洋廟新石器時代遺址」『考古學報』1986—1
- 安徽省文物工作隊 1982「潛山薛家岡新石器時代遺址」『考古學報』1982—3
- 安金槐 1983「近年来河南夏商文化考古的新收穫——為中国考古学会第四次年会而作」『文物』1983—3
- 安志敏 1989「試論河南地区龍山文化的社会性質」『中原文物』1989—1
- 尹煥章・張正祥 1962「対江蘇太湖地区新石器文化的一些認識」『考古』1962—3
- 曾昭燏、尹煥章 1959「試論湖熟文化」『考古學報』1959—4
- 海津正倫 1990「中国江南デルタの地形形成」『名古屋大学文学部研究論集』史学36
- 海津正倫 1992「中国江南デルタの地形形成と市鎮の立地」『江南デルタの市鎮研究』森正夫編、名古屋大学出版会
- 王洪華「広東始興県馬市、陸源發現新石器時代晚期遺址」『考古』1987—2
- 黄玉質・楊式挺 1965「広東梅県大埔県考古調査」『考古』1965—4

- 黄振鐸 1981「試論福建貝丘遺址的文化類型」『中国考古学会第三次年会論文集』1981
- 梶山勝 1978「南中国新石器時代晩期文化領域について—雲南・広西・広東・福建を中心として」『古代文化』30-1
- 夏竦 1960「長江流域考古問題」『考古』1960-2
- 金関文夫・国分直一 1979「台湾先史時代における大陸文化の影響」『台湾考古誌』法政大学出版局
- 賈蘭坡 1960「広東地区古人類及考古学研究的未来希望」『理論と実践』1960-3
- 韓起 1979「台湾省原始社会考古概説」『考古』1979-3
- 広東省博物館 1961「広東翁源県青塘新石器時代遺址」『考古』1961-4
- 広東省博物館 1964「広東紫金県光頂遺址の試掘」『考古』1964-5
- 広東省博物館 1983「広東南海県西樵山遺址」『考古』1983-12
- 広東省博物館 1984「広東南海県崙崗貝丘遺址発掘簡報」『考古』1984-3
- 広東省博物館・珠海市博物館 1990「広東珠海市淇澳島東澳湾遺址発掘簡報」『考古』1990-9
- 広東省博物館・珠海市博物館 1990「広東珠海市淇澳島沙丘遺址調査」『考古』1990-6
- 広東省博物館・珠海市博物館 1985「珠海北新石器与青銅器遺址の調査与試掘」『考古』1985-8
- 広東省博物館・東莞市博物館 1991「広東東莞市三処貝丘遺址調査」『考古』1991-3
- 広東省博物館・曲江県文化局石峡発掘小組 1978「広東曲江石峡墓葬発掘簡報」『文物』1978-7
- 広東省博物館・高要県文化局 1990「広東高要県蜆殼村発現新石器時代貝丘遺址」『考古』1990-6 『文物』1991-11
- 広東省博物館・楊豪・楊豪林 1983「広東高要県茅崗水上木構建築遺址」『文物』1983-12
- 広東省文物管理委员会 1956「広東潮陽新石器時代遺址調査簡報」『考古通訊』1956-4
- 広東省文物管理委员会 1961「広東南路地区原始文化遺址」『考古』1961-11
- 広東省文物管理委员会 1961「広東潮安の貝丘遺址」『考古』1961-11
- 広東省文物管理委员会 1965「広東西江兩岸地区古文化遺址の調査」『考古』1965-9
- 北田英人 1982「中国江南三角州における感潮域の変遷」『東洋學報』63-3・4
- 北田英人 1984「江南三角州の形成過程に関する中国の近年の諸研究」『北大史学』1984-8
- 北田英人 1989「唐代江南の自然環境と開発」『世界史への問い』1 歴史における自然 岩波書店
- 北田英人 1991a「唐代の江南開発と環境問題」『高校通信 日本史/世界史』東京書籍
- 北田英人 1991b「四一六世紀の湖州の塘路形成と環境変革」『中国水利史研究』21
- 北田英人 1991c「中国江南の潮汐灌漑」『史朋』24, 北大東洋史談話会
- 魏嵩山 1973「太湖水系的歴史変遷」復旦學級「社会科学版」1973-2
- 銀州遺址聯合考古隊 1995「柱状取樣法在貝丘遺址発掘中心応用」『中国文物報』1995年6月25日
- 嚴欽尚・洪雪晴 1987「長江三角州南部平原全新世海侵問題」『海洋學報』19-16
- 嚴欽尚・黃山 1987「杭嘉湖平原全新世沈積環境の演変」『地理學報』42-1
- 嚴文明 1987「中国史前文化的統一性と多様性」『文物』1987-3
- 嚴文明 1990「中国史前稲作農業遺存の新発現」『江漢考古』1990-3
- 嚴文明 1991「珠海考古散記」『珠海考古発現與研究』広東人民出版社
- 嚴文明 (岡村秀典訳) 1994「中国古代文化三系統説」『日本中国考古学会会報』4 日本中国考古学会
- 嚴文明 1995「中国史前の稲作農業」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995
- 黄漢傑 1957「福建邵武考古調査記」『考古通訊』1957-3
- 光澤県内遺跡群 1957「福建光澤新石器時代伊勢遺址の調査」『考古學報』1957-1
- 黄天水 1958「建甌県桂林郷発現古遺址」『文物』1958-5
- 黄文程・蔣炳劍 1957「福建仙遊発現新石器時代文化遺址」『考古通訊』1957-3
- 黄炳元 1958「南安桃源水庫新石器時代遺址」『文物』1958-11
- 国分直一 1972「南島先史時代の研究」慶友社
- 呉才輿 1959「長江三角州は 様形成的」『地理知識』1957-7
- 呉維棠 1983「從新石器時代文化遺址看杭州湾兩岸的全新世古地理」『地理學報』38-2
- 後藤雅彦 1991a「中国東南沿岸地域の先史文化—福建曇石山文化を中心に—」『史学研究集録』⑩國學院大學大学院日本史学専攻大学院会
- 後藤雅彦 1991b「先史中国沿海地域の地域性」『東南アジア考古学会会報』1991-11
- 後藤雅彦 1994「福建・広東の新石器時代研究」『東南アジア考古学会会報』1994-14
- 蔡鋼鉄 1995「温州出土新石器時代晩期石犁」『中国文物報』2月26日
- 佐藤洋一郎 1995「ジャポニカ長江起源説」『農耕と文明』講座文明と環境3, 朝倉書店
- 呉綿吉 1979「試論曇石山の文化性質及其文化命名」『廈門大學學報』1979-2
- 珠海市博物館他 1991『珠海考古発現與研究』広東人民出版社
- 朱非素他 1981「談談馬垠石峡遺址の幾何印紋陶」『文物集刊』3
- 朱非素 1984「石峡文化墓葬所反映的若干問題」『中国考古学会第三次年会論文集』
- 朱非素 1986「粵閩地区浮浜類型文化遺存の発源と探索」『人類學論文選集』中山大学出版社
- 朱非素 1988「近年来広東考古発掘新收穫」『広東省博物館館刊』1988
- 朱非素 1991「珠海考古研究新成果」『珠海考古発現與研究』広東人民出版社

- 朱非素 1994「珠江三角洲貝丘，沙丘遺址和聚落形態」『南中国及隣近地区古文化研究』中文大学出版社
- 朱非素 1995「広東考古新發現幾点思考」『東南亜考古論文集』香港
- 蔣炳劍・葉文程「甬田，仙遊，南安發現新石器時代遺址和文物」『文物』1957—5
- 深圳博物館・中山大学人類学系 1990「深圳市大鵬咸頭嶺沙丘遺址發掘簡報」『文物』1990—11
- 深圳博物館・中山大学人類学系 1990「広東深圳市大鵬沙丘遺址發掘簡報」『文物』1990—11
- 徐起浩 1988「福建東山県大帽山發現新石器貝丘遺址」『考古』1988—2
- 浙江省文物管理委员会，浙江省博物館 1958『浙江新石器時代文物図録』
- 泉州海外交通史博物館 1961「福建晉江流域豊州地区考古調査」『考古』1961—4
- 泉州海外交通史博物館，泉州市文物管理委员会 1961「泉州豊州獅子山新石器時代遺址」『考古』1961—4
- 曾広億 1965「広東潮安梅林湖西岸新石器時代遺址」『考古』1965—2
- 蘇秉琦 1978「石峽文化初論」『文物』1978—7
- 蘇秉琦他 1981「關於考古学文化的区系類型問題」『文物』1981—5
- 曾凡 1955「福建光澤新石器時代遺址調查簡報」『考古通訊』1955—6
- 曾凡 1958「福州浮村遺址的發掘」『考古通訊』1958—2
- 曾凡 1959「福建漳浦新石器時代調查」『考古』1959—6
- 曾凡・黄炳元 1959「閩東新石器時代遺址」『考古』1959—11
- 曾凡 1965「福建閩清永泰新石器遺址調查」『考古』1965—2
- 曾凡 1980「關於福建史前文化遺存的探討」『考古学報』1980—3
- 孫順才・伍賂苑・薰本風 1987「太湖地形及現代沈積」中国科学院南京地理研究所集刊 4
- 高谷好一 1985『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房
- 竹淑貞・呂全榮・奚建国 1986「長江口全新世沈積区及其沈積層序」『中国第四紀研究』7
- 張其海・呂宋芳 1965「福建閩侯曇石山遺址陶器分析」『考古』1965—4
- 張光直 1959「華南史前民族文化史提綱」『中央研究院民族学研究所集刊』1959—7
- 陳吉余・虞志英・譚才興 1959「長江三角州的地貌發育」『地理学報』25—3
- 陳公哲「香港考古發掘」『考古学報』1957—4
- 佟柱臣 1985「中国新石器時代文化三個接触地帯」『史前研究』1985—2
- 中山大学人類学系（張鎮洪） 1993「1986—1987年西樵山發掘簡報」『文物』1993—9
- 趙善德 1991「西江流域新石器文化遺存分析」『紀念黄岩洞遺址發現三十周年論文集』広東旅遊出版社
- 陳国慶 1991「中原地区和東南沿海地区鴨形壺」『東南文化』1991—5
- 鄧聰 1990「香港和澳門近十年来的考古収獲」『文物考古工作十年』文物出版社
- 鄧聰・黄韻璋 1994「大湾文化試論」『南中国及隣近地区古文化研究』香港中文大学
- 鄧增魁他 1991「封閉印紋陶分布，分期與年代探討」『紀念黄岩洞遺址發現三十周年論文集』広東旅遊出版社
- 中村慎一「江南の稲作文化—その起源と進化—」日中文化研究 2
- 南京博物院等 1960「江蘇省十年来考古工作中的重要發現」『考古』1960—7
- 南京博物院 1958「南京市北陰陽營第一，二次的發掘」『考古学報』1958—1
- 中川原捷洋 1976『育種学最近の進歩』17
- 中川原捷洋 1985『稻と稲作のふさと』古今書院
- 西江清高 1995「印紋陶の時代の中国東南部」『日中文化研究』第7号
- 範雪春 1988「福鼎県馬欄山新石器時代遺址」『中国考古学年鑑』1988
- 範雪春 1988「霞浦県黄瓜山貝丘遺址」『中国考古学年鑑』1988
- 潘風英・石尚群・邱淑彰・孫世英 1985「全新世以来蘇南地区の海侵和古地理演变」中国第四紀研究委員会・中国海洋学会編『中国第四紀海岸線學術討論會論文集』，海洋出版社
- 莫雅 1956「広東清遠県清河支流新石器時代遺址調查發掘報告」『文物參考資料』1956—11
- 莫雅 1957「広東宝安新石器時代遺址調查簡報」『考古通訊』1957—6
- 莫雅 1961「広東考古調查發掘的新収獲」『考古』1961—12
- 莫雅 1982「深圳市考古重要發現」『文物』1982—7
- 馬春郷 1957「江下遊發現新石器文化遺址」『文物』1957—7
- 福建省博物館 1976「閩侯曇石山遺址第6次發掘報告」『考古学報』1976—1
- 福建省博物館 1980「福建閩侯白沙溪頭新石器時代遺址第一次發掘報告」『考古』1980—4
- 福建省博物館 1983「福建閩侯曇石山遺址發掘新収獲」『考古』1983—12
- 福建省博物館 1984「閩侯溪頭遺址第二次發掘報告」『考古学報』1984—4
- 福建省博物館・浦城県文化館 1986「福建浦城石排下遺址試掘」『考古』1986—12
- 福建省博物館 1991「福建平潭殼頭遺址發掘簡報」『考古』1991—7
- 福建省文物管理委员会 1959「福建崇安新石器時代遺址調查」『考古』1959—11
- 福建省文物管理委员会 1961「南新石器時代遺址的調查」『考古』1961—5
- 福建省文物管理委员会 1961「北建甌和建陽新石器時代遺址的調查」『考古』1961—4
- 福建省文物管理委员会 1961「閩侯莊辺山新石器時代遺址試掘簡報」『考古』1961—1
- 福建省文物管理委员会 1965「福建省福清東張新石器時代遺址發掘報告」『考古』1959—11

- 福建省文物管理委员会・廈門大学考古実習隊 1964「福建閩侯曇石山新石器時代遺址第5次発掘簡報」『考古』1964-12
- 彭適凡 1981「江南地区印紋陶問題學術討論会紀要」『文物集刊』3
- 彭適凡 1987「中国南方古代印紋陶」文物出版社
- 香港大学美術博物館 1995『東南亜考古論文集』香港
- 香港中文大学 1991『環珠江口史前文物図録』香港
- 香港中文大学 1994『南中国及隣近地区古文化研究』香港
- 香港博物館 1993『嶺南古越族文化論文集』香港
- 宮本一夫 1991「中国新石器時代と古代伝承」『日中文化研究』6
- 森政夫 1992「中国江南デルタの地形形成と市鎮の立地」『江南デルタの市鎮研究』森正夫編，名古屋大学出版会
- 楊豪 1960「広東新豊江新石器時代遺址調査簡報」『考古』1960-7
- 楊式挺 1985「試論西樵山文化」『考古学報』1985-1
- 楊式挺 1986「広東新石器時代及相關問題的探討」『史前研究』1986-1, 2
- 楊式挺 1988「石峡文化類型遺存的内涵分布其與樊城堆文化的關係」『紀念馬垠人化石發現三十周年文集』文物出版社
- 楊式挺他 1989「広東封開県杏花河兩岸古遺址調査與試掘」『考古学集刊』6
- 楊式挺・陳志傑 1981「談談佛山河宕遺址的重要發現」『文物集刊』3
- 楊杯仁・謝志仁・楊達源 1985「全新世界面变化与太湖的形成演变」『第四紀氷川与第四紀地質論文集』2，地質出版社
- 李岩 1989「珠江三角洲地区新石器時代晚期至青銅器時代早期文化遺存的分期」『東南アジア考古学会会報』第9号
- 李伯謙 1992「広東咸頭嶺一類遺存殘認」『東南文化』1992-2, 3
- 李平日他 1991『珠江三角州一万年來環境演变』海洋出版社
- 龍成德 1988「曲江烏石床板樣發現的石峡文化遺址」『紀念馬垠人化石發現三十周年文集』文物出版社
- 龍王柱編 1991『漳州史前文化』福建人民出版社
- 廖晋雄 1992「広東始興県史前遺址調査」『東南文化』1992-5
- 林惠祥 1957「福建長汀河田区新石器時代遺址」『厦門大学学報』1957-1
- 林劍 1955「福建光澤県發現三处新石器時代遺址」『考古通訊』1955-2
- 林公務 1991「霞浦県黄瓜山原始文化遺址」『中国考古学年鑑』1991
- 林宗鴻 1958「福建浦新石器時代遺址的調査」『考古通訊』1958-4
- 不明 1985「閩侯県莊辺山新石器時代遺址」『中国考古学年鑑』1985

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

本文将着重考察中国東南沿海地区特別是分布于長江三角洲以南至珠江三角洲地区之間的新石器時代中晚期文化的歷史性变化，並探討其变化的主要原因。

根拠陶器的編年建立広東，福建兩省の新石器時代文化の發展序列。将広東省の新石器時代中晚期文化分為五期，並通過对已建立的福建省閩江三角洲の新石器時代文化の編年の分析，将其重新劃分為三期。本文認為珠江三角洲地区的Ⅰ～Ⅲ期和Ⅴ期大約分別相当于公元前4000～3500年和公元前2000年左右。而福建省閩江三角洲地区的Ⅰ期大約相当于公元前4000～3000年，其Ⅲ大約相当于公元前2000年左右。

通過兩個地区的比較研究可以看到，公元前4000前後の新石器時代文化面貌尚不明瞭。兩個地区在公元前4000年前後，現在的三角洲的内部地区，大陸的沿岸地区以及島嶼都正处在形成期。此外，還可以看到在珠江三角洲地区的Ⅰ～Ⅲ期，福建省閩江三角洲地区的Ⅰ期以後的一段時期內，遺址有減少的傾向。

通過对陶器群及遺址分布的分析指出，在珠江三角洲地区的Ⅰ～Ⅲ期這段時期內曾存在過兩個類型的集团：一個集团活動于從三角洲的内部地区到珠江口及大陸沿海的地帶，另一個集团只活動于沿海地帶。推測可能是由于生活空間的不同，形成了從內陸到沿海地区的由各種文化組成的網絡。最後将新石器時代中期遺址的分布突然密集起來的現象和長江下游進行了比較。認為中国東南沿海地区の新石器時代中晚期遺址的形成和地理環境的變遷有着密切的關係，它恰好深刻地反映了這個歷史性的变化。

The Neolithic Period along the Southeast Coast of China

NISHITANI Masaru

This paper considers middle to late Neolithic developments in the coastal region of South-East China stretching south from the Yangtze Delta to the Pearl River Delta, and the inherent dynamic which produced them.

The time-frame for Kwantung and Fukien Provinces is based on a chronology derived from pottery. In Kwantung's Pearl River Delta, the mid- to late-Neolithic has been divided into periods I-V, while in Fukien's Min River Delta the existing chronology posits a division into periods I-III. Periods I-III for the Pearl River Delta correspond roughly to 4000-3500 BC, and period V is around 2000 BC. For the Min River Delta in Fukien, period I is 4000-3000 BC, and period III is thought to be around 2000 BC.

Although the characteristics of the Neolithic in both areas prior to 4000 BC are still uncertain, a comparison reveals that at this stage settlement in both areas was located along upper delta watercourses, the coast and the islands. Also in periods I-III in the Pearl River Delta, and after period I in the Min River Delta, the number of sites declined.

Next, during periods I-III in the Pearl River Delta, judging from pottery types and gaps in the distribution of sites, it can be posited that there were two distinct groups of inhabitants. One group left its traces in that area extending from the upper reaches of the delta down to the mouth of the Pearl River and the coast, and the other exclusively in the coastal region. It seems likely that during the middle Neolithic the juxtaposition of these groups facilitated the creation of links between the two cultures which extended from the hinterland down to the coast. Finally, the unexpectedly dense distribution of mid-Neolithic sites is compared to that of the lower reaches of the Yangtze River. It is thought that developments in the mid- to late-Neolithic along the south-east coast of China reflect a close connection between geographical factors and the location of archaeological sites.